

反障害通信

15. 10. 21

54号

アベノミクスの第二弾とは何か？

—ダブルスタンダードのごまかしの政治を許さないために—

戦争法案を強行採決したアベ政治は、アベノミクスの第二弾をかかげ、内閣改造をし、来年の参議院選に向けた政治に入りました。

SNSでアベ政治のダブルスタンダードということが言われていました。その内容をわたしもくみ取って、わたしの『反障害通信』53号の付録で表を作りました。現在のにとらえ返して、もう少し手直しと増補することがありますが、とりあえずそのままにしています。インターネットをされている方は以下からアクセスできます。

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/adsnews-53-shi.pdf>

最初に、わたしもあいまいになっていた用語の整理からしておきます。アベノ政治をアベ首相のとりまきの日本会議的考えに基づくファシズム的な政治として使います。それも含んだアベ政治を、ダブルスタンダードの政治で、自民党保守の流れとアベノ政治へ行き来する政治として規定しておきます。

戦争法案は、まさに右よりのというより、アベノ政治として、とりまきの日本会議の意向に沿ったファシズム的な動きとしてあったのですが、今回は来年の参議院選に向けて、強行政治の中で下げた支持率をアップしようと、ダブルスタンダードということの、もう一方の自民党保守政治へ舵を切って、ごまかそうとしています。

さて、何をごまかそうとしているのかを暴いてみます。

まず、第二弾というなら、第一弾の総括をした上で出すことです。ですが、そのような総括は何も為していないということがあります。そもそも失敗したという批判が出ています。そもそも、アベノミクスは赤字財政をふくらませる公的資金の導入や株価操作の一時的経済浮揚策です。「選挙で何を基準に投票しますか」という世論調査をみると、「経済と雇用」ということがまずトップにあげられます。選挙前に経済を浮揚させ議席を確保・増やすという常套手段をとっているのです。選挙公約の他の個別の政策は後景に退いていますし、また戦争法案のようなことはちゃんと書いてもないという話です。時には原発政策のように公約違反までしています。それで、まるで白紙委任でも受けたかのようなそれを述べ立て、先の選挙で信任を得たとかいい、また、後の選挙で信任を受けるというごまかしを言っています。個別政策が信任されているわけではないのです。しかも、選挙制度も民意を反映し得ないシステムになっています。それは民意を反映させる政治システムがもはや機能していないのです。前から主張しているのですが、個別政策に民意を反映させる直接民主主義の制度を導入すべきことです。

さて、話を戻します。

第一弾が失敗したことで（失敗したとははっきり認めず、目標に到達していないと言っ

ているだけなのですが)、中国経済の落ち込みや、原油価格が下がったことによって、デフレが解消されなかった、としているのですが、そもそもアメリカでシェール石油の生産が進んだ事による原油価格の下げどまり、アメリカ経済の持ち直しがあった上で、円安が進んでいることも考えるなら、相殺されているわけで、そしてそもそも、経済は水物だとしても、予想が外れたなどという言い訳するのは政治家として失格です。しかも、そもそも消費税増税第二弾も含んで成長戦略の目標を出し、それを先送りしているのですから、アベノミクスが破綻していると言われることです。そもそも、グローバルゼーションが世界を覆い尽くした時代に、「成長戦略」など出すのが間違っているのです。もうずっと以前に自公の議員立法で「障害者自立支援法」を出すときに、「持続可能な福祉政策」ということを唱えたのです。それに合わせるなら、「持続可能な経済政策」となるはずですが（法的な流れの中で言いますが、福祉は基本的人権の問題で、「持続可能な」ということが基本的人権の保障を護れないとき、何よりも優先して財政出動すべきことで、そもそも、そのために福祉目的税として消費税の導入をしたはずで、一部金持ちの減税をし、大企業や金持ちのために「経済成長戦略」を謳うことこそ、取り下げることです）。アベノミクス批判は、今号の読書メモにもふれているので、そちらも参照してください。前号の読書メモ・水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社(集英社新書)2014も。

第二弾の内容は、具体的なことがまだ出されていず、意味不明なのですが、それでも、言い得ることがあります。ここでも三本の矢ということが言われているのですが、まず「強靱な経済」ということで、2020年までに600兆円へのGDPのアップがあります。これは、そもそもアベノミクスの第一弾の3%の経済成長に相当するようです。そもそも第一弾で失敗したことをどう総括しているのか分かりません。しかも、見え見えのごまかしです。というのは、3%という数字を出せば、毎年や月ごと、数ヶ月おきの経済成長率で、検証されますが、2020年ということで目標金額的に出せば、それまで失敗が露呈しません。しかも、2020年はおそらく首相は交代していますし、次の衆議院選ももう終わっています。失敗の露呈の先送りを計っているごかまし政治です。

さて、後の二本は、子育て支援や介護という福祉に関する政策です。アベノ政治からダブルスタンダードのもう一方の自民党保守政治の「国民の命と暮らしを守る」という福祉のところへ表面的転換です。一体何をやろうとしているのでしょうか？ 保育園待機児童0にするとか、介護職離職を0にするとかいうことが少し出ています。そもそも、第一弾で、生活保護の切り下げ、介護報酬の切り下げをしたのを忘れたのでしょうか？ そして、労働者派遣法の改悪の中で非正規雇用が進み、貧困率がますます拡大していく政治を進めたことを忘れたのでしょうか？ 福祉的な看板を表に出すのなら、第一弾でなした福祉の切り捨てや、「世界一企業が活動しやすい国にする」としてなした労働条件の改悪を、間違いだったと全部リセットしてから、出して行くことです。そもそも、なぜ福祉の切り捨て、切り下げを第一弾でなしていたのでしょうか？ お金を「成長戦略」や軍事費に回すためだったのではないのでしょうか？ その「成長戦略」が失敗したとして、相変わらず「成長戦略」の目標を同じにして、福祉のお金はどこから出て来るのでしょうか？

さて、これらをまとめて「一億総活躍」ということで突き出しています。

アベノ政治にとって、「積極的平和主義」でアメリカと一緒に戦争してひとを殺す

のも活躍だし、武器を売ってお金儲けするのも活躍だし、事故原因の究明も事故処理もできてない原発を輸出して金儲けするのも活躍なのです。活躍の中身をちゃんと吟味しないで、「活躍」などということばを軽々しく使って欲しくないのです。それに生活がなりたないひとを生み出す政策やって、活躍以前にセフティネットちゃんとやってから、「活躍」という言葉を使うことです。そもそも第一弾で「女性の活躍」という標語を出していました。こういう標語を出したのは、女性が総体的相対的に活躍できていないという状況認識があるからでしょうが、なぜ、そうなっているのかきちんと押さえて、そのことを解決する方向で、「女性の活躍」ということを打ち出すべきです。そもそもシングルマザーの貧困率が高いところでは、そして「夫婦別姓」問題とか、ヘテロセクシュアルなところにとらわれた性差別があるところでは、「一部エリート女性を登用する」というようなことにしかならず、総体的相対的に女性は男性に従属する差別から抜け出せないのです。だいたい、性差別的な考えにとらわれている女性を大臣に取り立てているし、ポーズとして「女性の活躍」を出しているという、みえみえのごまかしの政治でしかないのです。これも「ハダカの王様誰だーアベだ」（戦争法案に反対していたシールズのコール）現象のひとつです。

もうひとつ、これも既にいろんなひとから、出されていることですが、「一億・・・」という標語です。これはファシズム的な大翼賛政治に使われている言葉です。戦争法案などを成立させたというアベノ政治から、来年の参院選に向けてダブルスタンダードのもう一方の保守自民の顔を出そうというアベ政治は、福祉的なことを出そうとしているのですが、ファシズム的な標語を使ったら、「衣の下の鎧が見える」のです。

こういうダブルスタンダードの政治を暴き出し、とりわけファシズム的な動きをしつかりと押さえ、アベ政治総体を葬り去ることが今、必要になっています。

(み)

アベ談話批判

戦後70年という中で、アベ談話が8月に出されました。表面的には、ダブルスタンダードのアベ政治の中で、アメリカの意向や、財界の意向で、近隣諸国との摩擦はさけるということで、歴代内閣の過去の謝罪を踏まえるということで、アベノ政治を抑え、自民党保守の方へ移行した談話になっています。ですから、過去の謝罪を踏まえるというところで誰かが書いた文や憲法の引用はまっとうなことを書いていると思えるのですが、アベノ政治とは明らかに言動が矛盾しているし、一体何を言いたいのか、何をしようとしているのか意味不明の文もあるし、そのまっとうな文ならば、こんな談話出す意味があったのか、わからなくなるのです。アベ政治のやっていることに照らして、きちんと読み込んで行くと、どうもアベノ政治のファシスト的なことを織り込んでいる箇所が多々あり、恐ろしさを感じています。よく、ことばの上げ足取りをするとか、一部分を切り取って全体を見ようとしないうという批判がでてくるのですが、わたしは政治的発言は、法的文書と同じように、一部分をきりとっても論理的整合性を持つ文として仕上げていくことだと思っています。だからまとめて謝罪しようとして、謝罪をあいまいにしようとしたりせず、文のセ

ンテンスごとにきちんと謝罪のことばを織り込んでいく必要があると思います。「謝罪する気持ちがあれば」の話ですが、そもそも安倍政治の特徴は、ごまかしの政治で、何を言っているのかわからないようにしていく、いかようにもとれるような文を書いてごまかしていく手法をとっています。そのことを含めて批判していくために、文に沿った逐一的批判を試みます。ゴシック文字が安倍談話の本文、明朝斜体文字がわたしの批判文です。

8月は私たち日本人にしばし立ち止まることを求めます。今は遠い過去なのだとともに、過ぎ去った歴史に思いを致すことを求めます。政治は歴史から未来への知恵を学ばなければなりません。戦後70年という大きな節目にあたって、先の大戦への道のり、戦後の歩み、20世紀という時代を振り返り、その教訓の中から未来に向けて、世界の中で日本が、どういう道を進むべきか、深く思索し、構想すべきである。私はそう考えました。

「侵略の定義は歴史学者に任せる」として、「歴史から未来の知恵を学」ぶのを放棄しているふりをして、ごまかしているのは誰でしょうか？

同時に、政治は歴史に謙虚でなければなりません。政治的・外交的な意図によって歴史が歪められるようなことは決してあってはならない。このことも私の強い信念であります。ですから、談話の作成にあたっては「21世紀構想懇談会」を開いて、有識者の皆様に率直かつ徹底的なご議論をいただきました。それぞれの視座や考え方は当然ながら異なります。しかし、そうした有識者の皆様が熱のこもった議論を積み重ねた結果、一定の認識を共有できた。私はこの提言を歴史の声として受け止めたいと思います。そして、その提言の上に立って、歴史から教訓を汲み取り、今後の目指すべき道を展望したいと思います。

「政治的・外交的な意図によって歴史が歪められるようなことは決してあってはならない。」と言っていますが、内外の意見はきちんと受けとめなければ政治はできないから、あなたは第二次安倍政権発足時自らの意思を貫こうと靖国参拝をし、それによって、近隣諸国の国から批判を受け、首脳会談もできなくなったので、それ以来靖国参拝を取りやめています。また今回、自らの歴史認識とは違う「侵略」とか「お詫び」のキーワードを入れたのではないですか？ あなたの「強い信念」など政治的混乱をもたらすだけだということはまだ理解できないのですか？ 「そうした有識者の皆様が熱のこもった議論を積み重ねた結果、一定の認識を共有できた。私はこの提言を歴史の声として受け止めたいと思います。」というなら、憲法学者がこれまでに議論を積み重ねてきたところでの圧倒的多数が違憲だという戦争法案もとりさげるべきですよ！

100年以上前の世界には、西洋諸国を中心とした国々の広大な植民地が広がっていました。圧倒的な技術優位を背景に、植民地支配の波は、19世紀アジアにも押し寄せました。その危機感が日本にとって近代化の原動力となったことは間違いありません。アジアで最初に立憲政治を打ち立て、独立を守り抜きました。

西洋対アジアという対置は、大東亜共栄圏の名による、アジア解放論というごまかしで、アジアの国々を侵略していった歴史を彷彿させる発想なのですよー その反省ができて

ないから、こんなことを書くのですー

日露戦争は、植民地支配の下にあった多くのアジアやアフリカの人々を勇気づけました。世界を巻き込んだ第一次世界大戦を経て、民族自決の動きが広がり、それまでの植民地化にブレーキがかかりました。この戦争は、1000万人もの戦死者を出す悲惨な戦争でありました。人々は平和を強く願い、国際連盟を創設し、不戦条約を生み出しました。戦争自体を違法化する新たな国際社会の潮流が生まれました。当初は、日本も足並みを揃えました。

日本も日清戦争のときから、欧米の植民地支配に習って、覇権主義的なことを始めていたのです。朝鮮・台湾の植民地支配の反省が為されていないのです。

しかし世界恐慌が発生し、欧米諸国が植民地経済を巻き込んだ経済のブロック化を進めると、日本経済は大きな打撃を受けました。その中で日本は孤立感を深め、外交的・経済的な行き詰まりを力の行使によって解決しようと試みました。国内の政治システムは、その歯止めたりえなかった。こうして日本は世界の大勢を見失っていきました。

まるで、欧米諸国のブロック化が、日本が戦争を始めたきっかけのように書いていますが、日本もすでに、植民地支配を始めていたのです。日本も主体的にブロック化を始めていたのです。他国の批判をする前に自分たちのやっていたことの自己批判をちゃんとしましょう！

満州事変、そして国際連盟からの脱退、日本は次第に国際社会が壮絶な犠牲の上に築こうとした新しい国際秩序への挑戦者となっていった。進むべき進路を誤り、戦争への道を進んでいきました。

「満州事変」などというごまかしのことばを使うのは止めましょうー植民地支配としての「満州国」建設と、そのことによる他の国からの批判の中での、国際連盟からの脱退です。

そして70年前、日本は敗戦しました。戦後70年にあたり、国内外に倒れたすべての人々の命の前に、深く頭を垂れ、痛惜の念を表すとともに永劫の哀悼の誠を捧げます。先の大戦では、300万余の同胞の命が失われました。

「お詫び」や「謝罪」をちゃんとやろうとするなら、自分たちの犠牲の前に、加害してしまったことを記述することです。「国内外に倒れた」などという天災と間違えるような表現は、「謝罪」のときには使えません。「我が国が国家として奪った」・・命、と書くことです。

祖国の行く末を案じ、家族の幸せを願いながら戦陣に散った方々。終戦後、酷寒の、あるいは灼熱の遠い異郷の地にあつて、飢えや病に苦しみ亡くなられた方々。広島や長崎での原爆投下、東京をはじめ各都市での爆撃、沖縄における地上戦などによって、たくさんの市井の人々が、無残にも犠牲となりました。

まだまだ自国の被害から入っていくのですねーしかも、過去に国が行った責任からの首相の反省の文になっていない、客観主義的な他人事のような記述がまだまだ続いているのですー

戦火を交えた国々でも、将来ある若者たちの命が数知れず失われました。中国、東南アジア、太平洋の島々など、戦場となった地域では、戦闘のみならず、食糧難などにより多くの無辜の民が苦しみ、犠牲となりました。戦場の陰には、深く名誉と尊厳を傷つけられた女性たちがいたことも忘れてはなりません。

やっと、「加害責任」にふれるところに入ってきましたが、あくまで客観主義的な、天災が起きたような記述がまだまだ続くのですねー「加害責任」の反省になっていないのですー自分たちの国のひとの被害と自分たちが与えた被害をごっちゃにして、しかも、天災が起きたかのような話をしているのです。「戦場の陰には、深く名誉と尊厳を傷つけられた女性たちがいたことも忘れてはなりません。」これはどうも「従軍慰安婦」のことにふれているようなのですが、自分たちのやったことの反省の文になっていません。まるで、どこかのよその国がやった問題のような書き方になっています。謝罪の言葉も一片もありません。

何の罪もない人々に計り知れない損害と苦痛を我が国が与えた事実。歴史とは実に取り返しのつかない苛烈なものです。一人一人にそれぞれの人生があり、夢があり、愛する家族があった。この当然の事実を噛みしめるとき、今なお言葉を失い、ただただ断腸の念を禁じえません。

やっと「加害責任」のようなことが出てきました。ところが「何の罪もない人々に計り知れない損害と苦痛を我が国が与えた事実。」事実のあとに続く「反省」の文は、遙か遠く「今なお言葉を失い、ただただ断腸の念を禁じえません。」にあるのですが、これも天災にも抱く思いで、反省のことばではありません。しかも、「事実。」の後に「歴史とは実に取り返しのつかない苛烈なものです。」などと、まるで、歴史の法則性に従った戦争論のような話が出て来ます。これは戦争責任の棚上げです。反省する振りを無にすることです。

これほどまでの尊い犠牲の上に、現在の平和があり、これが戦後日本の原点であります。二度と戦争の惨禍を繰り返してはならない。事変、侵略、戦争。いかなる武力の威嚇や行使も国際紛争を解決する手段としては、もう二度と用いてはならない。植民地支配から永遠に決別し、すべての民族の自決の権利が尊重される世界にしなければならない。

「尊い犠牲」というのは、聖戦論につながることばです。「間違った戦争」という認識のときには、使えません。靖国の「英霊」ということばと共に、取り下げなくてはなりません。

「事変、侵略、戦争。」と並べて書いていますが、TBSの岸井キャスターが言っていました。が、「事変」ということばを他の言葉から切り離すのは、ごまかしです。「事変」ということで、相手勢力からしかけられたというニュアンスをもってしまうのです。歴史が明らかにしているように、「事変」自体が日本からしかけたことなのです。もしくは、日本の

侵略の中で起きたことです。後は、憲法の本質を書いています、これだと戦争法案をとりさげることです。そして憲法改正も取りやめることです。一言動不一致の、実のない、うそとごまかしの政治の典型のことばの引用です。

先の大戦への深い悔悟の念と共に、わが国はそう誓いました。自由で民主的な国を作り上げ、法の支配を重んじ、ひたすら不戦の誓いを堅持してまいりました。70年間に及ぶ平和国家としての歩みに、私たちは静かな誇りを抱きながら、この不動の方針をこれからも貫いてまいります。

「悔悟の念」と加害責任での反省が違ふことが分かりますか？ 「悔悟の念」では負ける戦争をしたことがいけなかったというだけの論理に結びついていくのですよー戦争の反省は、殺しー殺される、傷つけるー傷つけられる戦争をしてはいけないという反省なのです。自らの加害責任をはっきり打ち出して反省することなしには、反省にも謝罪にもならないのです。「不動の方針」ってなんですか？ 憲法改正をしようとし、無理だと判断して、解釈改憲を計る一何が「不動の方針」なのですか？ 「自由で民主的な国を作り上げ、法の支配を重んじ、」立憲主義を無視して、世論を無視して動こうとしている現実から、よくも白々しくこんなことばを使えるものです。

わが国は先の大戦における行いについて、繰り返し痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明してきました。その思いを実際の行動で示すため、インドネシア、フィリピンをはじめ東南アジアの国々、台湾、韓国、中国など隣人であるアジアの人々が歩んできた苦難の歴史を胸に刻み、戦後一貫して、その平和と繁栄のために力を尽くしてきました。こうした歴代内閣の立場は、今後も揺るぎないものであります。

過去の首相や政治家がやってきたのですねーそれで、それを踏まえて政治を行いますーで良かったのに、なぜわざわざ新たな談話を出そうとしたのですか？ あなたやあなたの周辺のひとたちが戦後談話の見直しというところで、新たな談話をだそうとしていたのではないですか？ よくも白々しく「こうした歴代内閣の立場は、今後も揺るぎないものであります。」と書けることだし、前項に戻りますが、何が「不動の方針」なのですか？

ただ、私たちがいかなる努力を尽くそうとも、家族を失った方々の悲しみ、戦禍によって塗炭の苦しみを味わった人々の辛い記憶は、これからも決して癒えることはないでしょう。ですから、私たちは心にとどめなければなりません。

ずーっと客観主義的な記述ー他人事のような記述が続いています。「家族を失った方々の悲しみ、戦禍によって塗炭の苦しみを味わった人々の辛い記憶は、・・・」は「わたしたちが命をうばった家族の方々の悲しみ、戦禍によって塗炭の苦しみを味わせた人々の辛い記憶・・・」と書くことです。謝罪をする意図があるのなら、「私たちは心にとどめなければなりません。」というのは何を心にとどめるのですか？ 何も書いていない、空っぽの心、空虚な反省にしかっていないのです。

戦後 600 万人を超える引き揚げ者が太平洋の各地から無事帰還でき、日本再建の原動力となった事実を。中国に置き去りにされた 3000 人近い日本人の子どもたちが無事成長し、再び祖国の土を踏むことが出来た事実を。米国や英国、オランダ、豪州などの元捕虜の皆さんが長年にわたり、日本を訪れ、互いの戦死者のために慰霊を続けてくれている事実を。

戦争の苦痛を嘗め尽くした中国人の皆さんや日本軍によって耐えがたい苦痛を受けた元捕虜の皆さんが、それほど寛容であるためには、どれほどの心の葛藤があり、いかほど努力が必要であったか。そのことに私たちは思いを致さなければなりません。寛容の心によって、日本は戦後、国際社会に復帰することができました。

寛容の精神をもったひとを基準にして謝罪をするのではないのです！ 「寛容」などということばは、謝罪する側が使うと、反省をする意志がないと受け止められるのですー日本が植民地支配していた国に行くと、「日本人が何しに来た」と怒りの目で向かい合うひとがいるのです。そのひとたちにどう向かい合い、きちんと謝罪していくのが基本なのです。

戦後 70 年のこの機にあたり、わが国は和解のために力を尽くして下さった、すべての国々に、すべての方々に、心からの感謝の気持ちを表したいと思います。

和解は終わっていないのですー和解を終わらせようと、ちゃんと謝罪していた、しようとしていたひとにもいたのに、それをあなたがまた反故にしようとしているのですー

日本では、戦後生まれの世代が今や人口の8割を超えています。あの戦争には何ら関わりのない私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません。しかし、それでもなお私たち日本人は世代を超えて、過去の歴史に真正面から向き合わなければなりません。

ふたつの相矛盾する文を並べて、意味不明の文になっています。前者の文は「歴史修正主義者」と言われているひとたちの「いつまで謝罪すればいいのか」という謝罪を反古にする主張と同じです。謝罪を口にしながら、一方でそれを反故にするような発言を自民党の議員や閣僚までもしてきました。「その先の世代の子どもたちに謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません。」というなら、謝罪を反故にするような発言をする与党議員達を与党から除名して謝罪を為しきる姿勢をしめさねばなりません。むしろ抱え込んできたことが問題だし、そもそも安倍首相がそんな発言をしてきた議員だったのです。

謙虚な気持ちで過去を受け継ぎ、未来へと引き渡す責任があります。私たちの親、そのまた親の世代が、戦後の焼け野原、貧しさのどん底の中で命をつなぐことが出来た。そして、現在の私たちの世代、さらに次の世代へと未来をつないでいくことが出来る。

「謙虚な気持ち」などということばを使うのなら、民意に耳を傾けてからにしてください。

住民の8割が反対している辺野古基地建設をとりやめ、半数以上のひとが反対している原発再稼働をとりやめ、これも多数の反対の意思を無視して強行した戦争法を廃棄してくださいー

それは先人たちのたゆまぬ努力と共に、敵として熾烈に戦った米国、豪州、欧州諸国をはじめ、本当にたくさんの国々から恩讐を越えて、善意と支援の手が差し伸べられたおかげであります。そのことを私たちは未来へと語り継いでいかなければならない。歴史の教訓を深く胸に刻み、よりよい未来を切り拓いていく。アジアそして世界の平和と繁栄に力を尽くす。その大きな責任があります。

国家の論理で進む政治と、民衆レベルでの交流・援助を取り違えているのですねーなんと甘い政治理念。戦争は国家の論理から出てきます。だから、民衆レベルでの交流援助を続けながら、民衆が国家主義と対決していく、そのことが戦争を防ぐ道なのです。

私たちは、自らの行き詰まりを力によって打開しようとした過去をこの胸に刻み続けます。だからこそ、わが国はいかなる紛争も法の支配を尊重し、力の行使ではなく、平和的、外交的に解決すべきである、この原則をこれからを固く守り、世界の国々にも働きかけてまいります。唯一の戦争被爆国として核兵器の不拡散と究極の廃絶をめざし、国際社会でその責任を果たしてまいります。

「力の行使ではなく」ということは、力を背景にした秩序の維持もしないということも当然含むのですよねーそれなら、なぜ戦争法を強行採決したのですか？

私たちは20世紀において、戦時下、多くの女性たちの尊厳や名誉が深く傷つけられた過去をこの胸に刻み続けます。だからこそ、わが国はそうした女性たちの声に寄り添い、常に寄り添う国でありたい。21世紀こそ、女性の人権が傷つけられることのない世紀とするため、世界をリードしてまいります。

これはあまりにもひどい話です。「従軍慰安婦」問題は世界的には「従軍性奴隷制」ということばで広く使われるようになっていきます。軍によってなされた継続されたレイプ被害という言い方もされています。それを、なかったことにしよう、きちんとした反省をしないようにして、被害を受けたひとたちを二重に傷つけてきたことを、あなたやあななの周辺のひとたちがやってきたのです。それで、「寄り添う」？ レイプ被害者がきちんと反省していないレイプ加害者に、そんな言葉が使われたら、どういう気持ちになるか考えてください。レイプ被害者がレイプ加害者に、ストーカーされる心理を考えて下さい。身震いすることです。

私たちは経済のブロック化が紛争の芽を育てた過去をこの胸に刻み続けます。だからこそ、わが国はいかなる国の恣意にも左右されない、自由で公正で開かれた国際経済システムを発展させ、途上国支援を強化し、世界のさらなる繁栄を牽引してまいります。

繁栄こそ平和の礎です。暴力の温床ともなる貧困に立ち向かい、世界のあらゆる人々に医療と教育、自立の機会を提供するため、一層力を尽くしてまいります。

現在社会の経済システムを一国の首相が知らないのでしょうか？

現在社会の経済システムでは、みんなで繁栄しようなんてないのですー
自国で格差を拡大し貧困を生み出す政策をしているひとが、一体何を言っているのでしょうか？

私たちは国際秩序への挑戦者となってしまった過去をこの胸に刻み続けます。だからこそ我が国は、自由、民主主義、人権といった基本的価値をゆるぎないものとして堅持し、その価値を共有する国々と力を携え、積極的平和主義の旗を高く掲げ、これまで以上に貢献してまいります。

「国際秩序への挑戦者となってしまった」という認識はおかしいと思います。まるでその秩序が正しいかのようです。その秩序は「帝国主義」列強の植民地分割合戦のルールだったのです。日本はそこにあるルールさえ無視して動いたのです。そんな「国際秩序」ということばを使うのは、負ける戦争をしたのがいけなかったという反省で、植民地支配の「秩序」そのものが悪いという、植民地支配の反省をちゃんとしていないのです。その反省がないから、力による均衡を作り、そこで秩序を作ろうという発想をするのです。だから「積極的平和主義」などという意味不明のことばを使うのです。武力による平和は作れない、これは歴史の教訓です。歴史修正主義者は、歴史をちゃんととらえ返せないのです。憲法9条の精神に真の文字通りの積極的平和主義の思いが込められているのです。それを破棄しようとしているのは誰ですか？ 「自由、民主主義、人権といった基本的価値をゆるぎないものとして堅持し」というのは、安倍首相が総裁をやっている自民党の改定憲法素案は、真逆の方向ですよー

戦後80年、90年、さらには100年に向けて、そのような日本を国民の皆さんと共に作り上げていく。その決意であります。

フクシマのとき、福島第一原発の当時の吉田所長が「東日本全滅を想起した」と語っていました。「戦後80年、90年、さらには100年」を語るなら、まず、すべての原発を廃炉にして下さいーそのときに日本があるという保障のために。そして、再び破滅の道へ突き進む戦争法を破棄することですー

読書メモ

今回は、アベノミクス批判のための本をもう一冊読んで、映画で学習していた沖縄の歴史を押さえておきたいと、一冊本を読みました。後は、前回読書メモでとりあげていた山口研一郎さんの編・著の本を何冊か読み、山口さんがコメントしている早川一光さんの本を何冊か読み、医療関係の学習をしました。そして、その本の中で取り上げられていた、石川憲彦さんの本を挟みました。実は、石川さんはわたしの中での障害問題での転換のきっかけをもらったひとで、そのようなことを含んで、もっときちんとコメントして置きたかったのですが、とりあえずのメモで、後で（既にもっている）何冊かの石川さんの本を読んでから、もう少し書き足します。最後はフェイスブックで横レス的に紹介してもらった経済学の本を急遽挟み読みしたので、それへのコメントです。

たわしの読書メモ・・ブログ 303

・服部茂幸『アベノミクスの終焉』岩波新書（岩波書店）2014

タイトルに惹かれて買った本で、すぐに読もうと思いつつ、なかなか読めないでいました。

過去の恐慌や不況時と比べながら、アベノミクスとは何か？ その効果は出ているのか？ を実証的に、図などを使いながら検証している本です。

タイトルから分かるように否定的です。

それなりに面白かったのですが、近代経済学的精細さで、そもそも原理的にとらえていくとアベノミクスの破綻は最初から論理的にはっきりしているという意識があるものだから、読み飛ばしてしまいました。

たわしの読書メモ・・ブログ 304

・明日川融『沖縄基地問題の歴史—非武の島、戦の島』みすず書房 2008

沖縄関係の映画、「ひめゆり」の映画を観た時に、アフタートークでプロデューサーが「非武の思想・文化」の話をしていて、「沖縄」「非武の思想・文化」でインターネット検索してヒットした本です。これ以上本を増やしたくないということもあり、どういう内容か、せめて「非武の思想・文化」だけでも読もうと図書館で借りて当該のところを調べようとしたのですが、連絡が来ず（随分後で来ました）、結局買ってしまい全部読みました。

東アジアの海上交通の要的なところに位置する沖縄・琉球は（「世界のへそ」押さえるひともあるようです）、「非武」ということで、戦をさける賢明さで対処していた歴史があるという興味深い話が最初に出てきます。「戦場ぬ止み」の三上智恵監督が、狭い島国の沖縄では諍いがあっても、相手をとことん追い詰めるようなことをしない文化があるというような話もしていますし、親を亡くした子どもを近所のひとで育てる文化がある（あった）というようなことも言われてきたことです。

この本は、沖縄戦から米軍占領の歴史を詳しく書きながら、日本の捨て石にされてきた歴史、日米の「防衛線」の最前線、アメリカの侵略戦争の軍事拠点にされてきた歴史、安保条約の交渉の歴史、地位協定の歴史を丁寧に掘り起こし、いかに過酷な状況におかれてきたかを書き記してくれています。

今、戦争法案の中で、沖縄の基地の置かれている状況が、辺野古新基地建設の反対の座り込みの抵抗の闘いの中で、如実になってきています。

自分がきちんと対象化できていなかった（結局、わたしが（も）「切り捨ててきた」と言われても仕方がない状況だった）ことが、反差別的に政治的課題として浮かびあがってきて、やっと対象化し始めるという、後付けのようなこと、原発問題にならぶこととして、わたしの中でとりあげ、広く訴えていきたいと思っています。

この本の最後に、日取真俊『虹の鳥』影書房 2006 という小説が出てきます。沖縄の苦しめられてきた歴史を、個人の抑圧関係になぞらえて描いているようです。注文したので、届くまで時間かかりそうで、間に別の本の読書メルを挟みますが、また読書メモ残します。

もうひとつ、この本の中に書かれている、安保条約や地位協定、そしてアメリカの世界戦略の歴史を読んでいく中で、まさに戦争法案というのは、アメリカの世界戦略の中で、アメリカの言いなりになっていく、集大成として戦争法案がだされていることが、はっきりしてくるのです。そして、安保条約とはそもそも何かということがとらえ返せる中で、今一度、憲法9条の精神に立ち戻り、安保条約を含むあらゆる軍事同盟を破棄し、「非武」という琉球文化を取り込み押し立てて、ヒロシマ、ナガサキ、フクシマを経験した立場での、「9条を世界憲章に」というところで、核の廃絶、軍縮へと、紛争の当事者国との仲裁を、それこそ、「積極的平和主義」として、世界の平和外交の「中心」を（一翼の方がいいのですが）担っていくことが、今必要なのではないかと思うのです。

たわしの読書メモ・・ブログ 305

・山口研一郎『生命をもてあそぶ現代の医療』社会評論社 1995

以前著者の講演会があり、そのときの話は、この本の著者の編・著の『国策と犠牲 一原爆、原発 そして現代医療のゆくえ』社会評論社 2014 という本をベースに進められたのですが、その本の読書メモと講演の内容については、blg.292 に書いています。この本は、その講演の時に置かれていた本を買ったのです。丁度20年前に出された本ですが、まるで、今の状況を書いているかのようであり、ますます危機的状況に陥っているという感があります。

著者の、おそらく最初の単著の単行本ではないかと思うのですが、現代医療の問題を取り上げています。3部構成ですが、それから切り離されて、最初に「0 いま、医療に求められているもの」があり、最後に「11 新たな医療をもとめて」があります。第1部は「蠢く医療—「脳死」・臓器移植をめぐる医療の動向」、第2部は「医療のひずみ—現代の医療・保健・福祉政策」、第3部は「医療の歴史的犯罪—七三一部隊とナチスの医学」という構成になっています。

優生思想的なところでの、脳死・臓器移植や安楽死・尊厳死などという医療の切り捨てと過剰な医療を併せ持つことが進んでいきます。また、ここでは書かれていませんが、TPPというグローバルゼーションの進行の中で、医療が資本の金儲け主義にますます繰り込まれてもいます。何のための医療かということ消失した、ひとをもの（マルタ・・「731部隊」で使われていたことば）的にとらえる科学的探求やバイオテクノロジーが何をもたらずかを考えない進行に、恐ろしさがますます増大しているのです。

母の介護の反省から出発した学習は、「医療の目的を見失った（医療の名に値しない）、過剰・過誤な医療と医療の切り捨て」というところで、押さえてきているのですが、そのあたり、医療のあり方のようなことで、もう少し勉強しようと思っています。山口さんの編・著の本まだ何冊か買っていますので、その本と、山口さんもコメントしている地域医療を進めてきた早川さんの本を何冊か読んでみようと思っています。

前のブログに書いたのですが、講演の時に、フロアーから質問が出て、「戦争ということで進むとき「医療のあり方」というような話は吹っ飛んでしまうのではないか？」という

ことに対して、著者は「ソフトのような議論も必要なのだ」と返されていました。わたしも、今、反原発や戦争法案の反対の集会などに参加しながら、ますます、ひとがいきるといことは何なのかということや、優生思想にそれとはなしに支配されているところからとらえ返し、そこから問題にしていくことも必要なのだと思うのです。それがないと、結局、戦争とファシズムの攻撃に飲み込まれていくのではないかと。

いつものように切り抜きです。関心を持たれたら、買って、もしくは図書館などで借りられて、読んでもらうための誘いになればと。

(「こうあって欲しい」という医療像として)「それは一つには「いつでもなんでも相談できる身近な存在としての医療」、もう一つは「病気だけを診るのではなく、患者をとりまく家庭・職場・視野会にも目を向け、解決の糸口を見出してくれる医療」ではないだろうか。」 9P

著者の父の口癖「よかろうもん」 11P・・・*過剰な医療をしないということと、余計な心配をするな*という「励まし」

「医療は人々の生をコントロールするものではなく、いつでも陰で見守り、後ろから支え、常にそばにいて安心感を与えるものだった。」 14P

医療の腐敗三つ・・・ 16P

「医療者がもっともしなければいけないことは、患者さんを最後まで一人の人間として大切にし、その方の人権を大切にし、その方の人権を尊重し、尊厳ある生をまっとうしていただくことである。そのことが結果的に、身内の方々の気持ちをもとほぐすことにつながるといえる。」 57P

「私は、これまで百名以上の「脳死状態」の患者さんを診てきた立場から、まさに「脳死の医療現場」の一場面一場面が、きわめて真剣な人生のドラマであること、そこには患者さんの一生が凝縮され、人々の気持ちがひとつとなり、それは残された人々の将来へとつながっていくであろうことを確信している。」 80P

(臓器移植が推進力と生み出していること)①“医局講座制”を利用しての圧力②臓器の商品化③国際的な差別の構造の中での臓器売買 89P

これまで持ってきた医療に関するイメージと遺伝子組み換えに代表される「先端医療」との6点对比 115-116P

(バイオテクノロジー批判)「そもそもそれぞれの生命は独自の構造、免疫機能を持ち、個体としての存在を保ち続け、それによって各種属間の調和が保たれてきた。数百万から数千万年のサイクルで、なんらかの環境因子や内在的因子により変異し、あるものは滅びることもある。それが自然の摂理であった。しかし、そこに人為的操作が加わり、数年から数十年という単位で変わっていくとしたらどうだろう。それは究極に全生態系の破滅を意味しないだろうか。自然のしくみ(掟)には、まだまだ人類が想像もつかないような神秘が存在している。それを人間の思いつき(思い上がり)で左右してしまうことは、絶対に許されることではない。・・・(中略)・・・このようなことが何代にもわたって繰り返される時、各種(高等)動物はその存立基盤である独自性を失い、結局生命体としての破滅を迎えることになるだろう。」 121-122P

「このように、現代の生命工学は、一見目の前に横たわる患者への治療行為というポーズをとりながら、その実、背後に各国の大企業、国際的企業が関与し、その利潤追求のために、生物（命）体そのものを物質として製品化している。その結果、地球規模での環境（自然）破壊をひきおこし人類は後戻りできない所に行き着いてしまうという危険性を常に孕んでいるのである。」 122P

医療・福祉の切り捨て①医療の受益者負担の増加②医療、終末期医療の見直し③在宅推進による家族の介護負担の増加 126-130P

「安全なくして労働なし」「抵抗なくして安全なし」 160P

「私は脳卒中になって、初めて人間の素晴らしさを知りました。この病気になってなければ、人の親切、温かさ、人と交わることの楽しさも知らずに生きていたかもしれません。今になってみたら、脳卒中になってよかったと思います」・・・著者が言われたこと・・・
反転 171P

「中国には『不忘歴史、意為友好（歴史を忘れないことが、友好というものである）』という言葉があります」ガイドさんのことば 186P

（七三一部隊の犯罪行為の柱になるもの）「一つには人間をモノとみる思想。人間を人間としてみず、材料として扱う思想である。もう一つは、目的のためには手段を選ばないという思想。三つ目は、その根底に流れる差別思想である。」 198-199P

「いわば戦前・戦中の文化、思想状況が、問い直されることのないまま、戦後今日まで続いているのではないか。その典型が七三一部隊の問題であり・・・（後略）」 217P

「生命に対する見方には二つあります。一つは価値を計量する視点。もう一つは意味を発見する視点。この意味の視点こそ仏教の生命観であり、人権の問題はそのまま生命の意味の問題になります。生きることの意味があるからこそ、人間同士の縁も生じ、自然とも共生していけるのです。」講師のことば 262P

たわしの読書メモ・・・ブログ 306

・山口研一郎編・著『操られる生と死—生命の誕生から終焉まで』小学館 1998

山口さんの著と編集本を追っていて、3冊目です。

これは編・著の本です。目次からたどっていけば、山口さんの「序章 治療という名の生命操作」で全体像を描き、臓器移植のレシピエントの当事者として寺尾陽子さんの「第一章 心肺同時移植を拒否して」、医者立場から出発し、今、国会議員として活動している阿部知子さんの「第二章 脳死・臓器移植—虚像から実像へ—」、「安楽死」「尊厳死」をとらえ返す、清水昭美さんの「第三章 「安楽死」「尊厳死」に隠されたもの」、脳死・臓器移植の問題で論攷を積み重ね、とりわけ「自己決定論」批判をしてきている小松美彦さんの「第四章 「死の自己決定権」を考える」、文明—思想的なところから掘り下げた、栗屋剛さんの「第五章 臓器移植と現代文明」、不妊治療というところから始まった生殖医療が優生思想的なところへの展開となっていると生殖医療を批判をする利光恵子さんの「第六章 生殖医療と遺伝子診断」、731部隊の侵略と戦争犯罪を不問にすることから始まった戦後医療をとらえ返す、芝田進午さんの「第七章 医学者の倫理と責任」、バイオテク

ノロジーの医療的浸食批判の論攷を積み重ねている、福本英子さんの「終章 生命操作医療の構図と生命の唯一性」、編集者の山口さんの現代医療の課題というところでのまとめ「結び 私たちに与えられた課題」という内容になっています。

脳死臓器移植、「安楽死尊厳死」、近代バイオテクノロジーの医療への浸食、というテーマを軸にして、医療とは何か、ひとの生と死をとらえ返す、貴重な本です。だいぶ前に出された本で、雑誌などで論攷を読んだりしているひとの名が出ていますが、こういうところで結びあっているのかを感じたりしていました。

さて、いつものように切り抜きです。あくまで、現時点のわたしの感じ方で、既に、何冊か、論文のいくつかを読んでいる著者の文もあり、そのときに共鳴していたから、今回はとくに新しい共鳴が特になかったところで、読み流してしまったことなどもあります。新しく読むひとには、もっといろんなインパクトもあるかと思うのです。一度、読んで欲しい、手にとって欲しい本です。

(石川憲彦さんを引用して)「障害を含む病気という概念そのものが西洋医学によって創り出されたものとして捉える。」 20P

(ハンス・リュージュ)「今日の医学は医薬産業とがっちり手を組んだ医学権力が、大衆に無理強いしてくる教義であり、健康は国民から多額の金を絞り取る口実として使われるに過ぎず、真の目標は富と力の増大なのだ」 21P

自己決定の名による正当化 23P

生物の多様性はヒトという種を保つために必要 25P

「生命科学による遺伝子環境汚染は、物理学の原子力開発による放射能汚染や科学による環境汚染より、さらに深刻で計り知れない事態を引き起こしかねないと、・・・」 25P

「今生殖技術を含めて、科学・技術は人間の生存の奥深くへと分け入るようになった。またそれが時に生命への不遜に結びついていく。それ故にこそ医師たちは常に「科学的探求心」を超える「人間的共感」を持つことが要求される時代と言えるだろう。」 76P

「苦しい時に発する「死なせてほしい」とか「殺してくれ」という表現は、「死」を求めることばではなく、苦痛の最大限の表現なのである。それをはき違えて死の希求と受け取り実行してはならない。」 85P

「死の自己決定権」はある種のファシズムといっても決して過言ではないと思えるのである。」 118P

(18世紀西洋に登場した)「個人閉塞した死」 125P

「そもそも「尊厳のない苦痛に満ちた生」と対をなすのは、「尊厳のある安らかな死(亡)」ではない。「尊厳のある安らかな生」のはすだ。「尊厳のない苦痛に満ちた生」が問題であるならば、私たちが追求しなければならないのは、「尊厳ある安らかな生」である。生の領域内の事柄は、あくまでその中で考え、打開策を講じなければならないのではないか。にもかかわらず、思考はねじれ、死の領域へと向かってしまっているのである。」 131P

「人権概念の前提をなす人間観は、人間を相互に独立するものとして捉える。一人の人間は他の人間とかかわりなく、まず個人として成立している、と考えるのである。わかりやすく言うなら、「私は私、あなたはあなた」というわけだ。したがって、私には私の自由

や人権があり、あなたにはあなたの自由や人権がある、ということになる。」 149P

「医学が大切なのではなく人間が大切なのだ。医学は人間のためにあるのであって、人間が医学のためにあるのではない」と 206P

「知らぬが仏」というが、「知らぬがお陀仏」という言葉こそ現代にふさわしい。七三一ネットワークと予研=感染研に代表される「医学者」の犯罪の追及と決済、その「体質」の精算は、現世代と未来世代の生命の権利の保障のために、果たされなければならない緊急の課題である。」 239-240P

「まさに殺すために「生きた死体」が作られるのであり、その合法性を保障するために、死の定義変えられ。あるいは法律が作り変えられるのである。／これはいいかえれば、ものになるために、私たちが生きる時間軸の先っぽのところでいのちを削りとられるということでもある。」 252P

「生命の唯一性というのは、人は誰でも生まれつきに関係なく、みなかけがえのないいのちだという人間観のことで、おそらくこれはふたりと地球上に同じ人間は生まれえないという生物学的な事実を根拠に人間が作りあげてきたものだろう。前提はもちろん技術的介入を受けないことである。これが人権概念の土台である。」 254P

「もの化を前提にした根本的破壊である。こういう世界を生きていく知恵を私たちはもっていない。どうやら私たちには、自然にかわって、この技術が新しい脅威になり始めているようだ。」 255P

「医療の産業化」と「医療の権力化」 260P

「私たちは、さまざまな方向から少しずつ人格を削りとられ、生きる時間をもぎとられ、ついでに体もかすめとられて、生命力を衰えさせていく。ここに生じる圧倒的な力の差から読み取れるのは、ひとつの権力構造の発生である。医療が権力になったのである。これも比喩ではない。現実である。／人間が社会システムとして作ったのではない、技術が生み出したこの権力は、たぶん経済活動のエネルギーを吸収して自己増殖していくだろう。そこでは、生殖細胞操作に人為的にかけられた規制など、簡単に消し飛んでしまうはずだ。人は、生命の唯一性を失い、ものの意味を与えられて、資源としてこの権力の支配下にはいるというわけである。」 262P

「治療」「尊厳」「自己決定」という粉飾 263P

生命操作技術について、「だがどうやらこの技術には、作ることが即、破壊だという奇妙な逆説がかかえこまれているようで、まず医療が人間を破壊し始めている。破壊は一時的な逸脱の結果ではなくて、生命操作医療の本性だ。一方で産業の生命利用による生命系破壊の兆しも出始めている、これも同じ技術使う限り避けられないことだろう。だとすれば、この革命の達成は破壊と同義で、人類は自分自身を食い散らしてせっせと破滅の道を掘っていることになる。」 266P

「おそらく、私たちは、いま、人間とはなにか、生命とはなにかと、あらためて考えなければならないところに立たされているのだろう。これは哲学的な命題なんかではない。ものである位置を引き受けて、願望を満たされつつ荒廃してくのか、これを拒否して、生命の唯一性をとるのかという、きわめて現実的な選択の問題である。」 267P

「これが（遺伝子診断が・・・引用者）人の生殖に利用されて出生前診断と保因者診断

に持ち込まれた時に、人の遺伝的質による差別と遺伝管理のための強力な道具になり、優生学的な人口操作に道を開くということである。出生前診断の技術はすでに多様なものが出揃っているが、そこに最も尖鋭な技術を加え、さらに保因者診断まで可能にして、親になる人たちの遺伝管理と選別までやってしまうのである。」 269-270P

「日本の文化はかけがえのない意味がそれぞれの生命にあるという視点を持っていたのではないか。例えば、一杯の飯を「御飯」と言って、「御」の字をつけ、食うと言わず「いただく」と言った。一杯の飯にどれだけ値打ちがあるのか判断して拝んで食べたのではない。我々の生活の原点を支える根っ子としての主食を粗末にしたら罰があたると、私たちは年寄りから常々教えを受けた。そこで教えられたのは、価値でなく生命を支える意味だった。価値の論理で考える限り、価値のあるものだけを優先して、ないものは切り捨てられる。その後には強いものだけが残ることにならないだろうか。」 276-277P

「生きることについて考えようとする時、私たちはたった一人で生存していることを決して思い浮かべはしない。常に他者（そこには人間以外のあらゆる動植物・自然も含まれる）との関係の中で「生きていること」を実感する。生命活動とは他者との共同作業と言うこともできる。そこでは互いの習慣や性格・体質・免疫機能をふくめた生物学的な多様性が必要となる。互いに違うことこそ共同性を保障する。」 284P

「生活に根ざし、人間関係を豊かにし、公共の福祉に貢献する医療の復権」 286P

たわしの読書メモ・・ブログ 307

・ 山口研一郎編・著『生命(いのち)—人体リサイクル時代を迎えて』 緑風出版 2010

前のブログに続く山口さんの編・著本です。前の本は具体的な課題について展開していたのですが、こちらの方が生命倫理的なところを思想的に展開している本です。

いつもは、もう少し本の内容について対話しているのですが、今回は、ちょっと脱線気味にわたしの思いに引き寄せて、コメントしてみます。

第1章は、山口さんの「人体リサイクル社会の行き着く果て」

この山口さんの文がこの本の全体的基調になっています。

第2章は、八木晃介さんの「健康幻想と優生思想」

八木さんは、わたしが差別の問題の掘り下げをしようとして、本を読み始めたときに、最初の頃にまとめ読みした著者です。部落差別を中心に差別についていろいろ吸収させてもらったのですが、唯物史観的な観点をもっていただわたしは、「差別=差別意識」的なところで疑問を感じ、ピタッと追うのを止めてしまいました。その後も精力的に本を書かれているのを知っていたのですが、「こんなところで再会するとは」という思いです。ジャーナリズムの世界から理論的なところで活動されていたと思っていたのですが、「安楽死法制化に反対する市民の会」の事務局などをされて、運動的なことを展開されていたことをこの本の中で知りました。この本の中では、健康幻想というようなところでの論攷、わたしが母の介護の経験から、老いや病をとらえ返す中で、刺激を受けました。健康ファシズムということでわたしも一部展開していたことの道筋が鮮明になってきました。

第3章は、最首悟さんの「いのちへの作法」

東大の学園闘争のときに、リーダーシップをとられたひとたちのひとりで、後に「星子」という「障害者」の親になられて、そこから新しい論を展開されています。わたしは、「障害者」当事者と親との位相の違いということを感じ続けていて、最首さんにも何かそこで噛み合わなさを感じています。元々、生物学で学に入られていたところで、思想的にもすごい博学で、いろいろ論考され、いろいろ提起を続けられています。ところで、わたしは障害の医学（・生物学）モデル批判をしています。そのキーワードは物象化ということです。マルクス的には「社会的なことを自然的なこととしてとらえる錯誤」ですが、最首さんはマルクスは読まれているだろうし、最首さんの論攷には構造主義の話などもでていますが、脱構築とかいうことも出てきません。実は、わたしが本を出して、その出版社関係で、『情況』という雑誌に「障害者解放運動の今」という特集をくんでもらい、わたしも一文を寄稿させてもらいました。その特集の中で、最首さんが対談をされていて、わたしの本にもコメントしてもらっています。最首さんの独特な文の展開があって、カオスとして提出するということなのですが、そのことも含めて。わたしは理解できないままになっています。実は、何冊か本は買っていて、短い文は読んでいるのです。わたしは読書メモを書いていて、メモなので、整理できないままになっています。そのまま出しているのですが、最首さんの『星子が居る一言葉なく語りかける重複障害の娘との20年』世織書房 1998 は読んでメモも一応書いたのですが（ブログ 40）、ちゃんとまとめ読みをしてから、きちんと整理し直そうとオクラ入りにしています。なんとかそのうちに、きちんと整理してみようと思っています。

第4章は、天笠啓祐さんの「生命観変貌の社会史」です。

天笠さんは、バイオテクノロジー関係で文を精力的に書かれていて、わたしも何冊か単行本を読み、そして共著の本も読んでいます。

バイオテクノロジーの問題は、不妊治療や臓器移植や難病の遺伝子解明（一遺伝子治療）というところにおいて、医療的要請という形をとりながら、命や体の部品化—モノ化というところで、優生思想的なところに突き進んでいます。そのあたりのことが、この論攷の中でわたしの中でも鮮明になってきました。

第5章は、神戸修さんの「いのちの否定—宗教による戦争と差別の正当化—」

わたしの仏教の対象化は差別の問題からでした。宿業論とか仏教思想が差別に及ぼした負の面から入ったのですが、廣松さんの『近代の超克論』や『仏教と事的世界観』あたりで、西洋近代知とは別の東洋的世界観とそこでの仏教思想というようなところで、キリスト教的な一神教的世界観と区別された仏教的な関心、そして親鸞の思想あたりでの反差別論との交叉もあるのではと思っています。神戸さんは仏教の住職の立場での、差別の問題や、権力に取り込まれる、とりわけ先の戦前戦中の大政翼賛的にとりこまれた反省というようなことを展開されています。一度仏教的世界観との対話のためにちゃんと学習しておかねばと思っているのですが、果たせそうにはないので、このような出会いでの対象化を積み重ねて行きたいと思っています。

「おわりに」があり、山口さんの高史明さんの話、澤潟久敬さんの『医学概論』へのかなりの量の抜き出しコメントが書かれています。以前に書いた（ブログ 292）、山口さんの講演の時に買った本の中に、澤潟久敬さんの『医学概論』に関する論攷があり、またこれ

も読んで置こうと思っています。だいぶ読書計画が一杯になっていて、かなり後になりそうですが。

さて、いつものように切り抜きです。

第1章

「「米国型医療の導入」は宇沢氏の指摘通り、「社会的紐帯の解体」「人間関係の崩壊」をもたらしている。」 25P

バイオテクノロジーの導入による非人間化 36P

「技術的人道主義はゆっくり煮立ってゆく風呂のようなもので、いつ悲鳴をあげたらいいのかわからない」(バートランド・ラッセルの孫引用) 36P

「「自然治癒力」という観点から「健康」と「病気」、「生」と「死」を考えることが不可欠である。」 42P

「それは(新しい人工動物(生物)・引用者)いずれ、生物界や地球そのものの破壊を招き、「核」や「地球温暖化」に続く第三の危機となる危険性を有している。」 44P

「現代の「医療崩壊」は、「医者数が足りない」「現場が忙しすぎる」「患者さんの要求が増えた」から生じたのではなく、地域のコミュニティの崩壊にこそ真の原因がある。」 52P

「私たちは、関係性の中の「いのち観」をこそ大切にしなければならぬ。」 53P

第2章

「篠原がいうように、「健康・健全イデオロギー」(「」は引用者、このカギ括弧の文字にヘルシズムというルビがついています)こそまさしく優生思想の原器であると私も思います。」 69P

「憲法では健康は「権利」として規定されましたが、健康増進法では「責務」(義務)にすりかえられたのです。」 85P

健康と優生思想を巡る動きで、戦前・戦中と現在の「新たな戦前」との類比 93P

日本尊厳死協会の転向は、「偽装転向」 96P

「(安楽死・尊厳死の・・・引用者)法制化は保証よりも強制に親和性をもつものなので。」 96P

家族の「家族幻想」的变化 105P

厚労省「終末期医療の決定プロセスのあり方に関する検討会」のガイドラインと日本尊厳死協会試案の補完関係 97P

「「わが内なる優生思想」への不断の自己点検が不可欠なのです。」 106P

「アメリカなどの移植医は脳死のことを harvester (収穫物)とよびならわしています。」 109P

「「たすからない生命」(レイピエント)を「たすからない生命」(ドナー)によってたすけようとする行為の中に、「生きるに値する生命」と「生きるに値しない生命」という価値観(すなわち優生思想)がどうしても媒介的にはたらいっているのではないかと私には感じられます。しかも、そこに安楽死・尊厳死問題や後期高齢者医療制度の場合に顕著にみられるような医療費の問題が介在してくるとすれば一。」 111P

第4章

天笠さんの「第4章 生命観変貌の社会史」の「1 バイオテクノロジーの歩みと生命特許」162-170Pは、この本の中で一番（新しく吸収し得たという意味で）刺激を受けたところですが、わたしはこのテクノロジーがヒトという種の絶滅の危険性ということではおさえていたのですが、ひとのモノ化という処での深化というところで改めて押さえ直しています。そもそもは労働力の商品化というモノ化というところで発することではないか、そのことの止揚、すなわち労働の廃棄—労働の仕事への転換というところまで押さえ得ないと、この進行を止め得ないのではないかとも思っています。これについては、このところを読みながら考えたことを、後に「新自由主義的グローバリゼーションの（収奪の構造の）4つの位相（4D的展開）」（仮題）という論攷としてまとめたいと思っています。ので、抜き書きではなく、項目的な指摘に止めます。

分子生物学の誕生 162P

生命がモノとして取り扱われる 163P

過程のあいまいさ、粗雑さがおぞましい 163P

20世紀が産業の米粒としての半導体—21世紀の産業の米粒としてのDNA 164P

技術は倫理を押しつけて進む 164P

人工人間 165P

生命の唯一性の否定としてのモダン・バイオテクノロジー166P

生命を経済の論理として組み入れる 166P

「生命を扱う」第一産業に特許はなかったことが、特許になっていく 166P

かけがえのない生命のもつ固有の論理を経済の論理で消失させた 169P

バイオパライシー170P

「倫理はおカネの前にいつも無力である。」 195P

第5章

「おかげさま」の考え方 198P

「しかしながら宗教は、歴史的に見れば、こういった視点の上に、むしろいのちを否定してきたのである。」 198P

「大切なのは「生きている」「人間」を「殺し」「心に痛みを与える」ことは決して許されない、という当然の事実であり、この事実を認知することが困難なのではなく、その事実を捻じ曲げようとする者の論理を見破ることが大切なのである。」 200P

いのちの苦しみを解放する「無常」「無我」の世界 201P

「無三悪趣の願い（「浄土」とは三つの根本的な悪のない世界であるべきである）」 202P

「自分という存在が、他者のコントロール下にあるとき、私達は限りない恐怖を感じる。

204P

非対称性 204P

「天皇制とは、「巨大ないのちの収奪システム」だったのである。」 206P

「人間を超えたものに対する畏敬の念」・・・神の産出の構造—物神化 209P

パスカル「人は宗教的信念によるときほど、喜び勇んで徹底的悪を行うことはない」 211P

「非合理的領域を設定して、それに対する屈服を要請することは、せいぜい（現実の歴史が示しているように）そこに「現実の」人間を滑り込ませてそれに対する服従を説き、「人

間の人間に対する支配」＝「いのちの否定」を正当化することに役立つに過ぎないであろう。」 214P

靖国崇拜・参拝の論理・・・死を意味なきことにしたくない 219P・・・「正しい戦争」ということに通じる。

本覚思想・・・「差別は差別のまま平等」「差別の現在相に平等の充満せるを見る」 225P・・・仏教のひとつの差別性

「差別の肯定の背後には、自然と社会との（意図的）混同がある。」 227P・・・まさに物象化ということ

風土と国家の混同 229P

「いのちのモノ化」 230P

おわりに

山口さんの澤瀉久敬さんの『医学概論』からの抜き書き・・・これについては後で別の本であたるので、とりあえず幾つかだけ

「医学」を自然科学としてではなく、社会科学としてとらえる 242P

「健康とは何か」・・・4つ・・・242P

「生命を守ることこそ医道の根本である。」 246P

「医道にとって何より大事なことは、理論を弄ぶことではなく、身をもって実行することではなければならない。」 246P

たわしの読書メモ・・・ブログ 308

・早川一光『わらじ医者京日記ーボケを看つめて』ミネルヴァ書房 1979

『続 わらじ医者京日記』ミネルヴァ書房 1980

前のブログの山口さんの編・著本によく出て来る、京都西陣で地域医療を進められてきた早川一光さんの本二冊です。

前者が「認知症」ということを軸にした本、後者は医療全体を見通しての、自らが携わってきた医療の本、いずれもエッセー的な本です。

病気は本人が治すもの、医者はその手助けをするものという基本的姿勢で、しかも、京都の西陣で住民自身が（著者らの医者立場から働きかけもあって）作った診療所一で、出前診療や隠れた患者探しをしながら、地域医療をつくりあげていく、「わらじ」ということばに表されるように、住民の中に入れ入るような医療活動をしていったひとです。山口さんの本の講演にあった、「小医は病気だけを看る、中医は病人を看る、大医は社会を看る」という中国のことわざに示されるように、単に医学ということだけでなく、社会学的な、そして文化や文学や、哲学的なことも素養をもった世界観を備えたところでの医療活動を続けているひとなのです。

わたしの個人的な体験を書いて置きます。わたしは団塊の世代で、熾烈な「受験戦争」を経験していました。で、当時は公教育の中で補習授業などもあり、また進路指導も進められていました。で、理系が就職に有利とかで、理系の勧めもありました。そういう中で、高校三年になると進路志望でのクラス分けがあり、ざっくりと文系と理系を分けた上でカ

リキュラムも分けたのです。そういう中で、医学系の志望クラスも作ったのです。わたしは高校の時は薬学部志望だったのですが、医学系ということで一緒にされました。英語の教員で、授業がしょっちゅう脱線するひとがいて、そういう話の中で、「進路は、医学部がいい」という話をしているひともありました。で、クラスメイトで、医学部志望のひとの志望理由というのが、(もちろんちゃんと理念をもっているひとでもいて、そういうことをみんなの前で言うのが気恥ずかしいということもあったのかもしれませんが) ほとんど生活が安定する、お金が入ってくる、職業地位的に敬われるというような雰囲気でした。「医は仁術ではなく、算術」という感じなのです。そういうこともあって、わたしは医者や医療に対する不信感をもってしまいました。

著者の早川さんのような医者と出会っていたら、たぶん医者に対するイメージが違っていただと思います。

さて、読書メモという本題から脱線してしまいました。早川さんは医者なので、治すというところで活動していて、予防とか健康ということも求めていくのですが、必ずしも、病や障害の否定性にとらわれない、時には反転させていて、反障害論を主題にしているわたしとしても共鳴すること多々でした。そして、前者の本が主題にしている「認知症」に関することも、「ボケないように」というところで展開しつつも、『ペコロスの母へ会いに行く』のマンガで、介護をしていた作者の「ぼけることも、わるいことではない」というような台詞に通じる話や、反転さえする話も出てきます。

すごく刺激的な本です。

いつもは抜き書きをしているのですが、この本は読みやすい本なので、是非、自分で読んでみてください。

たわしの読書メモ・・ブログ 309

・早川一光／立岩真也／西沢いずみ『わらじ医者の来た道 -民主的医療現代史-』青土社 2015

早川さんの本3冊目。4つのパーツからなっています。早川さんの自分史。立岩さんとの対談。そして、立岩さんの早川さんがやってきた「民主的医療」を医療、とりわけ地域医療の歴史からの押さえる作業。早川さんの娘さんの西沢さんの父のやってきた医療を、歴史的に押さえる論攷。

「総合人間学」的観点をもった、経営の論理に引きずられることに抗した医療のあり方を問題にする観点は、医療の原点回帰の医療なのだと思います。これだけの気概をもって、そして90を過ぎて、自らの患者の立場になったことから自らの医者としての立場をとらえ直し、これからが本番というバイタリティに敬服しています。

また、共産党から京都市の市議会議員になり、共産党の「民主医療」とも交わっていたのですが、前衛党的なことを批判するヴ・ナロード(人民の中に)的に「住民の立場に立とうとする」その姿勢も、そもそも運動論的にも興味深いことがあります。すごく刺激的な本です。

いつものように抜き書きです。

「人間の生命をあずかる職業に就くには、まず儒教・宗教・哲学・社会学、そして文学・

芸術も医の基礎として心得る必要があると分かった。」 12P

「メスを捨てた。／私は外科医である前に医師、医師である前に人間であった。」 16P

「革命を起こすのは党でなく、住民だ、住民一人ひとりの意識変革が世の中を変えるのであって、共産党が変えてやる、解放してやるというのは間違いだ、という思いがどうしても拭えなかったんです。健康を守るにしても、「自分の体は自分で守る」という自主の考え方を、どれだけたくさんの人たちに持たせるかということが、福祉、保健、疫学であると僕は思うんです。」 91-92P

「自然が治すのであって、医者からは下から支えるだけである。ピポクラテスが言ったと言われていますが、これが医療の一番の基本です。」 96P

早川さんの「認知症論」とウェイトの置き方（立岩さんの問いかけ） 97P

「一緒に苦しみ、一緒に悲しむ」 98P

医師としてのスタンスと、それを「91になってやっと自覚してきた」ということ 101P

「何のために医者になるのか」と聞いても、「食いばぐれがないから」と。・・・(中略)・・・
そんなことで医者になられたら、患者はたまったものではない。」 110P

西沢さんの論攷から

「早川たちは「出っ張り医療」「踏み込む医療」を実践した」「自由民の生活・暮らしをみて人を診る」「住民の中へ」の実践で、「福祉と医療はもともと住民のためにある」ことに早川は気づいた」「政治は住民のもの、住民の要求こそ政治の基礎であること」を早川は強調した。」 209P

「住民の自主性を守ることは、共同体を先導することではなく「最後まで随伴」することだと学んだという。住民運動における早川の位置は、「先頭」から「住民の中へ」そして「住民と共に」という形をとるようになる。」 212-213P

「医療は暮らしの中にある。」 218P

「ただ記憶がいいとか、要領がいいとか、そんなもの医者にしたらだめだ、人の傷みがわかるものだけが、医者になる、看護婦になる。」 218P

「病む本人が主治医であり、子どもが患者ならば名医は母親だ。病む人の自立・自主を尊重し、医療はその力を援助し、保護し、増力させる行為である。」 219P(父親も記す)

看護師の主体性の尊重と先駆的訪問看護の歴史 220P

「さいごに」から

老いの問題を自分が当事者になってとらえ返している 234P

総合人間学の必要性 235P

「何年かかっても「これでよい」というときはずっと来ないのです。」 235P

「九一歳を過ぎ、これからが本番です。」 236P

「「今どきの若い者は・・・」という年寄りにはなりたくない。「一緒に勉強しような！」というかたちで、わらじの緒を締め直して緩めない。」 236P

たわしの読書メモ・・・ブログ 310

・石川憲彦『治療という幻想—障害の医療からみえること』現代書館 1988

かつて、60年代後半に学園闘争があり、全共闘運動の中で自己否定の論理が広まってきました。それと共鳴する内容をもって、精神科医の中で反精神医学という流れがあり、東大には赤煉瓦病棟がありました。この著者がそのことにどう関わっていたのかは記したものは見ていません。この著者は「医療を否定する医療」ということを実践していた、と言いつづける内容をこの本から見て取れます。しかも、ことば化するのが難しいような、迷いつづける実践です。関係論的な論攷が展開され、すごく哲学的な掘り下げた論攷にもなっています。しかも、それが誰かの哲学的な流れの中で、それをベースにした哲学という感じではなく、過去のいろいろな思想との対話は勿論ありますが、まさにオリジナル的な哲学なのです。この本は学習会のテキストとして使い、そしてそれを元にいろいろ議論していく、そんなことをイメージさせる貴重な本です。

実は、わたしがこの著者を知ったのは、この本の中に出て来る朝日新聞の記事の中で、です(118-121P)。当時、わたしは「障害の否定性」にとらわれ、そこから抜け出せずもがいていました。その中で、その記事と出会い、「障害の否定性」の否定」という、わたし自身の生涯をかけるテーマをつかんだのです。著者とその講演会でお会いしたときに、その話をしたこともあります。

この著者は「治す」ということばを使わず、「直り一直す」ということばを使っています。そして、医療は、直りを手助けするものだというところから、原点回帰して出発します。その世界観をここに記して行きたいのですが、余りにも膨大になるので、また部分を切り取っても、この著者の世界観がなかなかとらえにくいので、何冊かの本を買っていますので、その読書メモを残すときにもう少しコメントします。

たわしの読書メモ・・ブログ 311

・松尾匡『ケインズの逆襲、ハイエクの慧眼』PHP 研究所(PHP 新書)2014

こういう本はわたしの学習計画には入って来ないものですが、インターネットの SNS 上で、「おや」と思える文に反応し指摘しておかねばとコメントしたのに、横レスとして批判をもらったときに、文献としてあげてもらった本です。

他者ときちんと対話するときには再読するのですが、ざっと読んでいただけでも、おかしいと思うことがあり、なにせこういう本は読まないのだから、知識としては新しいことが多々あるので、「知的な好奇心」を煽られるのですが、わたしは知的な好奇心で本を読むには、時間的余裕のない貧しいひとです(もっぱら、運動(問題解決のための活動)の理論的深化と共有化のための学習として本を読んでいます)。いくつか読み違えが起きることを覚悟で読書メモを残して置きます。横レスしてもらったひとは、「お友だち」になっていないひとなので、届かないかも知れないのですが、一応オープンな場で対話したこと、問いかけられたことには基本ちゃんと応える主義なので、メモとして出しておきます。

わたしは経済学も不得手にしています。ですが、そのわたしさえ、経済学で何が焦点になっているか、そのいくつかは、それなりにつかんでいるつもりなのです。

まず、ソビエトの崩壊を資本主義的金融政策の失敗に求めている話があります。

確かに、ソビエトは崩壊したときは、というより「社会主義革命」を標榜しつつ、もう

当初から資本主義の枠内に落とし込められ、いわゆる文字どおりの「国家独占資本主義」でしかありませんでした。ですが、そもそも「一国社会主義国家」が可能だとして、それを標榜しつつ、「革命の大義」において、労働者民衆の生活よりも国家の維持・発展ということを優先させたのです。さらに資本主義的経済に邁進する中で格差が拡大し、「社会主義」の幻想が崩壊したのです。ロシアの破綻の主要因はそこにあったというのが、一般的とらえ方ではないでしょうか？　そもそも、金融政策など言い出せば、「社会主義ではない」ということが露呈してしまうことで、支配体制がもっと早く崩壊することではないかと思えます。

もうひとつは、このひとはアベノミクスということをとらえ損なっているとしかわたしにはとらえられません。何かアベノミクスを評価するようなことまで書いているようなのです。アベノミクスは一時的景気浮揚策として出されたものではありません。継続的な経済成長戦略を装っています。そして、そのときに押さえなければならぬのは、金融緩和や財政投資として出動していけば財政破綻していくことなのです。この本が出されたときには、もうすでにギリシャなどの金融危機が問題になっていました。その後のギリシャの反緊縮経済が西欧からの圧力で、どうなったかをとらえ返すことができます。アベノミクスはアベノ政治を進めるための、そしてそれは戦争法案や派遣法改悪のための、選挙対策としての一時的景気浮揚のごまかしでしかありません。この本にはそのあたりの肝心なことが書かれていません。そして、アベノミクスが装う継続的経済成長、一時的浮揚としての財政赤字などでないところで財政出動などしていけばどうなるのかということもきちんと押さえたところで、アベノミクスの評価が必要なのだと思えます。

このことと絡んでいるのですが、このひとは現在の資本主義をどう押さえているのかが、さっぱり分からないのです。経済は一国では収まらないということは書いていますが、グローバルゼーションということが世界を覆う中で、それまで新しい市場の開発ということでもなしえてきた成長が難しくなっているという問題です。だから、アベノミクスの継続的なという意味での「経済成長戦略」などということは破綻せざるを得ないという認識はないのでしょうか？

経済の専門家なら、自分の書きたいことだけ書くのではなく、すでに議論になっていることと対話しながら、きちんと全面展開して欲しいと思います。わたしの読み違えとかあるかも知れませんが、別のところで書かれているのかもしれませんが、そうならば、そういうことを少しでも書いて置かれることではないかと思うのです。それにベーシックインカムの話など、ベーシックインカムの定義をしてからではないと始まらないことを、定義もなしに進めておられるので、意味がつかめません。左翼とか左派とか保守とかいうこともきちんと定義していかないと議論が錯綜していくのではと思っています。

さて、話をインターネット上のやりとりにつなげます。

わたしがコメントしたのは「左派と金融政策論はアンチノミー」ということです。（ちなみに、アンチノミーとは、「二律背反」と訳され、「両概念が同時に存在し得ない」ということになると、押さえています。）

この本を勧めてもらったひとの批判は、「日本ではそういうことが言えるかもしれないが、それは特異的で、ヨーロッパやアメリカではむしろ左派の金融政策論が一般的にある」と

いう趣旨のことです（批判してもらったひとの趣旨をわたしが理解した内容です）。

昔、「学者」のひとに、「自分の不得手な分野のことに首を突っ込まない方がいいよ」という忠告をもらったことがあります。そのときにわたしが考えたのは、「そもそも専門化ということが進んでいく中で、むしろ総体的にとらえることが必要になっていて、そうでない専門性自体がおかしくなっている」ということです。ですから、経済学もわたしが不得手とする分野ですが、あえて首を突っ込みました。

さて、そもそものわたし自身がきちんと言葉の定義から入らなかったという問題と規定のあいまいさがあります。「左派」という言葉ですが、左派というときには「相対的左派」ということも含みます。「アメリカ民主党は共和党に比べて左派である」という言い方がとりあえずできます。「とりあえず」と書いたのは、どちらも政権交代をくり返している保守で、そしてアメリカは反共的なイデオロギーに支配されていて、こういう場合、左派ということばを使わず、リベラルという言い方をするからです。

そうとはいえ、相対的左派という言い方は、ヨーロッパ社民と保守の間で言い得ることもあり、ここは誤解を招かないように、「左翼と金融政策はアンチノミー」という表現にすることでした。ここで、すでに議論の中で左翼ということばの定義を出していましたが、左翼を「資本主義の止揚」という方向で動くグループというように規定しています（「資本主義の止揚」というあまり使われていないことばの説明については後で書きます）。

わたしは西洋社民は保守党との間で政権交代をくり返していて、その中で「資本主義の止揚」という方向を消失しているのではないかと考えています。問題は、この本の中でも、紹介されている北欧社民の動きです。わたしはこれは「福祉国家」ということで押さえていて、しょせん競争原理で動いているので、修正資本主義です。結局グローバル化の波に飲み込まれていくのではないかと、思っていました。しかし、この本の中で紹介されているように、保守党との間で揺り戻しで政権交代しつつ、それなりに「福祉国家」を維持してきているようです。この本の中で一番吸収しえたことです。ですが、結局資本主義の原理から逃れているわけでもなく、この本の著者も書いているように一国の枠内で資本主義はとらえられないので、それを世界的に広げていこうとするときに、「福祉国家」が世界的なところに広がっていきけるかということ、わたしはそもそも資本主義が資本主義である限り、悪無限的利潤の追求という「資本の論理」から逃れ得ないのではないかと考えています。「北欧における福祉国家は差別の解消に向かうか？」という問いかけがあるのですが、これについては「資本主義の止揚」の説明と一緒に最後に書きます。このあたり、わたしは「べてるの家」が突き出している労働観とか世界観がどこまで、広がりをもつかというようなことに類比しています。このあたりは、また別の機会に書きます。

さて、もうひとつ、この本で紹介されている、社民でないけれど、欧州議会で一定の力をもっているとかいうヨーロッパ左翼党の話のことで、「左翼と金融政策」の問題を書いて置きます。

それらの党（フランス共産党とかかつてのイタリア共産党の流れの党などなど）は、一応左翼だと思えます。それらは日本共産党が、一応「資本主義の止揚」という方向性をもっているという意味で、「左翼」と言い得ることと同様ではないかと思えます。それらの党が、金融政策など出しているか知りません。日本共産党が金融政策の公約を出していると

いう話はきいたことがありません。もし、これらの「左翼」がそのようなことを出すとしても、それは連合政権構想の中で左翼性を封印する形で出すことではないかと思います。

よく、与党は野党に「対案を出せ」といいます。戦争法案のときにも、そういうことを与党が言っていたのですが、それに対して野党は「憲法違反の法律に対案など出せない」と応じていました。それと、同じように「資本主義の止揚」ということを突き出しているときに、「金融政策の対案を出せ」という議論など問題にならないはずですが、そもそも、日銀の金融政策とか内閣法制局の憲法判断とかNHKの報道とか、中立性の幻想をもっていたのに、アベノ政治がトップを自分の意に沿ったひとにすげかえて、一体化していつているという批判も必要なのだと思っています。

さて、ちょっと脱線します。以前、「報道ステーション」でキャスターの古館さんが脳科学者の養老孟司さんと対談しているのを見ていたのですが、どういう流れてそういう話になったのか、「ながら族」的に見ていたので分からないのですが、養老さんが「貨幣というのは幻想だ」という話をしていました。「幻想」だとして、その幻想にとらわれなくて生きようとするにはどうすればいいのか、という話になると思うのです。金融政策というのも、実は「貨幣の幻想」ととらわれたところで起きていることなのです（実は、これはマルクスが『資本論』で展開した「貨幣の物神的性格」というところに通じることなのです）。

わたしが金融政策のような本を読まなかったのは、わたしが本を読み始めたころにはマルクス派経済学と近代経済学との棲み分けのようなことがあって、近代経済学の資本主義をどう発展させていくのか、維持していくのかというような話には、関心がなかったからです。

昔は、学者は多少なりともアカデミックなところで生き得たので、そして社会科学総体にマルクス派がかなりの勢力をもっていたのでしょうが、どんどん排除されていったようです。そういう中で、もともとはマル経だった流れから近経的なところに踏み出していく流れも出てきているようです。最近読んだ本に、前号の読書メモの**水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社(集英社新書)2014**があります。この著者は、元々「世界システム論」というところの経済学の流れから出てきたひとです。さて、そもそも「左派の経済学」ということが問題になっていますので、わたしが学んだ（わたしサイドの解釈にすぎないのですが）マルクス派の経済学の流れを簡単に押さえることによって、対話の参考にしてもらえればと書き置きます。

マルクスの経済学が「現代資本主義論—帝国主義論が欠落している」という批判があり、レーニン『帝国主義論』が出てきました。それは植民地支配時代の資本主義分析だとして、ポスト・コロニアリズム時代の「帝国主義論」としてレーニンと同時代人のローザ・ルクセンブルグの『資本蓄積論』の「継続的本源的蓄積論」が注目されだしました（反差別論からすると、この「継続的本源的蓄積論」ということが大切になります。レーニンの「帝国主義論」は差別の階級支配の道具—手段論なのですが、ローザの「継続的本源的蓄積論」は差別の構造というところで分析していくのに使えるのです）。それが「従属理論」あたりにリンクしながら（わたしはこのあたりは読んでいません）、「世界システム論」として展開されていきます。そして、その中で展開されていたグローバルゼーションという概念を展開 r.

ネグリ／ハートの『<帝国>』が出ました。そして、スーザン・ジョージあたりが、<帝国>中枢国の周辺国への収奪の構造を暴き出しました。そこから「オルター・グローバルゼーション」という突き出しがありました。それは「もうひとつの世界は可能だ」という標語に顕れています。これは、南米とか「先進国サミット」への大規模デモということで、運動と結びついた理論として展開されていたのですが、少なくともマスコミでとりあげられるようにはならないという意味で低下しています。「もうひとつの世界」のイメージがつかめないこともあったのではないかと押さえています。

さて、話を『資本主義の終焉と歴史の危機』に戻します。もともと世界システム論が経済予想的性格をもっていたのですが、この本のタイトルは内容とあっていないのです。この本の著者は内閣府の官房審議官を務めた経歴のあるひとで、経済政策的なことのために、資本主義分析としての「世界システム論」を使い、そこでアベノミクス批判をしているのです。本の内容としては「持続可能な資本主義経済」としてアベノミクス破綻を見据えて、持続可能な資本主義のためのソフトランディング的な展開になっているのです。そういうところで、マル経的なところの近経的なところへの融合的なことが進んでいるのかもしれませんが。この『ケインズの逆襲、ハイエクの慧眼』という本も一応マルクスが入っているという意味で、そういう融合の一例かも知れませんが、ことばの定義があいまいで、わたしはむしろマルクスが少し入っている近経というようにしかとらえられません。まあ、きっと、この著者からは素人論議と退けられる感想でしかないのかもしれませんが。

さて、「資本主義の止揚」の話です。分かりやすく書くならば、「反資本主義」なり「資本主義の否定」ということになるのですが、宗教的復古主義（原理主義）やファシズムも「反資本主義」や「資本主義の否定」は言うのです。「止揚」とは弁証法で、これ自体いろいろ議論されているので、こんな書き方をしてしまうと余計わかりにくくなることもあります。あえて書き置けば「歴史の流れに沿った資本主義の否定」という意味になります。

わたしは反差別論をやっているので、その立場から説明すると、「差別の構造そのものを解体する資本主義の否定」ということになります。「差別の構造そのもの」の否定ということは、反差別ということで、どうも「自分が差別されるのはいやだ」とかいうところにとどまっているひとや、「自分の差別は問題にするけど、他者の差別はしらない（さておく）」とか、「自分は差別されるのはいやだ、差別する側になりたい」とかいろいろなベクトルがあります。そういうことではなく、差別ということが、どういうところであるのかをとらえ返して、根底から差別をなくしていくことを意味しています。もう少し説明すると、わたしは障害差別を軸にして反差別論を展開しようとしています。そこで、障害差別の基底には「労働力の価値を巡る差別がある」という規定をしていて、そして「資本主義社会における差別は、労働力の価値を巡る差別に収束される傾向を持つ」という規定もしています。ここで、「北欧における福祉国家は差別の解消に向かうか？」という命題にリンクします。スウェーデンで高齢者の自死が多いとか、なぜ「福祉国家」スウェーデンで、優生手術—断種手術がかなり広汎に行われた歴史があるのかの問題にそのことは示されます。スウェーデンでも、障害差別の思想の背景としてある優生思想から逃れ得ていません。わたし

しは、これは市場経済を廃棄しないかぎり（商品生産活動としての労働を廃棄して仕事として転化しえないかぎり・・・労働は商品生産活動、仕事はひとの生きる営為の一環としての生産活動としてとりあえず規定）、障害差別や高齢者差別から逃れ得ないというように押さえています。（このあたりは、マルクス派経済学の読み違いによる障害差別から逃れ得ない論攷という問題にもつながって行きます。この松尾さんの本の中で出て来る「マルクスの労働価値説」という話です。マルクスの『資本論』を労働が価値を生み出すというようにとらえてしまうと、優生思想から逃れ得ません。「資本主義社会では労働が価値を生み出すという物象化された相で立ち現れる。」となります。物象化ということばはとらえにくいので、通常使われる言葉に置き換えると、「資本主義社会では労働が価値を生み出すという共同幻想にとらわれる。」となります。このところは先に挙げた、養老さんの「貨幣という幻想」にリンクしてください。）

話がだいぶそれました。この本はそれなりの面白さはあったのですが、結局この本で著者の言わんとすることと、わたしの思いは余り交叉しませんでした。

情況への提言詞(5)

とんでもないこと

戦争の脅威をあおり、武力の対峙の中に平和があるという錯誤の中で、平和法制とか「積極的平和主義」などということばを弄ぶこと・・・戦争のない平和な世界の時代などなかった、更に平和というのは支配や差別や飢えがないことも含めて平和であるということ

ひとを殺す武器を一国の首相が外国にも売り込む、武器輸出産業の政治営業本部長として死の商人になりさがること

原発事故を起こし、その原因究明もちゃんとしないままに、アンダーコントロールとか、「世界一（最高レベル）の安全基準」と大ウソをつき、危険性の指摘を無視して再稼働を進めようとし、日常的放射能の放出をしながら、更に輸出までしようということ

アベノミクスという経済成長幻想をふりまき、そこでのトリクルダウンという大うそをつき、財界・金持ちのための政治を進め、格差・差別を拡大していくこと

経済の論理で、原発や温暖化やテクノロジー的な環境破壊をすすめ、また資本の未来を見ない現実主義的な利潤の追求に奉仕し、未来世代の生きる環境、社会的資源を奪っていくこと

ひとの肉体の一部（細胞や遺伝子レベルのことを含めて）をモノとして扱い、それを通して、ひとそれ自体がモノ化しようとしていること

映像鑑賞メモ

沖縄関係の映画鑑賞から始まったコーナーですが、ケーブルテレビでやっていたアウシユビッツのトラウマのような映画にリンクしました。そして、観ておきたいと思っていた「標的の村」劇場版の自主上映会で観れました。もうひとつは、脱原発・反原発運動のドキュメント映画です。

たわしの映像鑑賞メモ 005

・ジル・バケ＝ブランネル監督「サラの鍵」2011(フランス公開 2010)

ケーブルテレビでの映画鑑賞です。

フランス・パリとニューヨークとイタリア・フレンチェを舞台にした映画。

1942年フランスのパリでユダヤ人がフランスの警察に連行されて競輪場に収容されました。そこはトイレもなく、劣悪な環境、そして列車でアウシユビッツなどの収容所に送られました。フランスがユダヤ人虐殺でナチス・ドイツに手を貸して虐殺に至らしめたその数、7万5千人とされています。フランスの大統領がフランス政府と警察が行った犯罪として謝罪した事件です。2009年、その事件を追っていたフランスの雑誌社の女性記者がいました。その女性記者がこの映画の一方の主人公。このひとが、その連れ合いの祖父母のアパートを譲り受け改築して住む予定になっていました。そして、その地区がユダヤ人が多く住んでいた地区であることを知り、しかも、祖父母がそのアパートを手に入れに引っ越してきた時が、その連行事件の少し後の頃です。それで、犠牲者の掘り起こしをしているところで調べてもらったら、やはり、そこにはユダヤ人家族が住んでいたとのこと。両親と女の子と弟。この女の子がサラ。この1942年と2009年の話が絡み合うように進んでいくのです。

警察がアパートにやってきたとき、警察に「3日分の外泊の用意をして一緒に来い」といわれて、両親と一緒に競輪場に連れて行かれます。サラはとっさに弟を納戸に鍵をかけて隠し、「わたしがいいと言うまで、決して出てはいけない」と言って。そして、まず父親と引き離され、そして母親とも引き離されるのです。この引き離されるシーンは壮絶なのです。両親の名は、虐殺されたひとの名簿に名が記載されています。サラは競輪場にいたときから具合が悪く、母と引き離されて意識を失っていて、気がついたら親切にしてくれる同い年かちょっと年上の女の子がそばにいました。で、鍵をかけて置いてきた弟のことをずっと悔やんでいたサラは、自分の世話をしてくれた子とフランス国内の仮の収容所から、弟を助け出すために逃げ出します。ですが、その相手の子が具合が悪く、農家に助けを求めます。その子は結局ジフテリアで亡くなります。で、その農家の老夫婦に頼んで汽車に乗ってパリの自宅に戻ります。そこには、もう、新しいひとが住んでいて、サラが扉を叩くと出てきた子どもが、かの編集者の連れ合いのお父さん、その子を押しつけるようにして家に入りカギを開けると、サラは叫び声をあげ、泣き叫びます。

さて、2009年の雑誌編集者は、サラの消息を尋ねていきます。その中で、連れ合いの父からサラの話をきくのです。そして、調べていくと、連れ合いの祖父がサラに、サラを育てていた農家の養父にお金を送り続けていたことを知り、それで、アパートをめぐる負い目のようなことは一応解消されるのですが、サラ探しは終える訳にはいかなかったのです。

一方その雑誌編集者は、一人目の子ができて、その後更に子どもが欲しいと、不妊治療などしていたのですが、結局できない中で、諦めかけていたとき、サラ探しの真っ最中に、妊娠していることに知ります。それで連れ合いに告げるのですが、もうこの年で子どもはいやだと言われます。で、中絶の方に傾いていたときに、サラが育てられた農家の老夫婦の孫と連絡が付きます。で、サラが深い傷を負ったフランスを飛び出して、世話になった農家の老夫婦をメモ書きを残してニューヨークに行って結婚しているという話を聞きます。で、その編集者はそもそもアメリカ人でニューヨークで育ったひと、姉がニューヨークにいて、そこに転がり込んで、サラ探しをします。で、何件も回る中で、サラの家を探し当てます。サラは交通事故で亡くなっていました。で、その連れ合いは重い病の中にあり、連れ合いがサラ亡き後結婚した連れあいとその娘から「会うのを控えて欲しい」と言われます。それで、息子がイタリア・フレンチェにいてということなので会いに行きます。で、サラの話とその弟の話をするのですが、「わたしの母には弟はいなかったし、母はユダヤ人ではない」と拒絶されます。で、そのサラの息子は父に会いに行きます。そこで、父から「微笑みの中に、何かを抱えていたサラ」との出会いの話をし、結婚してそれが深い悲しみであったという話を聞くのです。そして、交通事故というのは、母が弟を餓死においやったこと、両親を虐殺されたことの深いトラウマの中で鬱になり、「酒と薬におぼれる」中で、トラックに突っ込んでいった自死であったことを知らされ、父から母の日記を渡されます。

一方でその編集者は、子を産む決意をして、どうしても受け入れられないという連れ合いと分かれる覚悟をします。

二年後、2番目の娘を生んだ編集者はフランスの雑誌社を辞めてニューヨークで住んでいて、そこにサラの息子が訪ねて、生まれてきた子どもを乳母車に乗せてきて、レストランで会います。その元編集者は、自分の思いが先走る中で、相手の気持ちを考えず、サラの息子を傷つけたことを謝罪します。サラの息子は、父がサラのことを息子に語る中で安らかに死ねたこと、そして母—サラのことを知れたことを良かったと語るのです。そして、サラの息子は、編集者に新しく生まれた娘の名前を訊きます。その名前は「サラ」。息子は顔を覆い泣き出します。そこで、映画は終わります。この映画を何回もみているわたしもそのシーンで涙が止まらなくなるのです。

ナチス・ドイツのホロコーストで、深いトラウマがユダヤ人のみならず、ヨーロッパに、そしてアメリカにも飛び火して、影を落とす、いやむしろ覆っているということを感じるのです。

わたしが、時には細切れになりつつも何回もこの映画を観、そして涙するのは、丁度、沖縄のドキュメンタリー映画を観ていたことがあったのです。「ひめゆり」やガマでの集団自決事件の中で生き残ったひとの深い深い心の傷、それは、サラの母親と引き離されるときにサラと母親の叫び、そして、サラが鍵を開けたときの叫び、それがいかにトラウマとなり。サラの中にあり続けていたのか、そしてそのことが広く覆っているのか？

沖縄のひとたちは、むしろ叫ぶことさえできず、そして深いトラウマとして抱えさせられていて、なおかつ、土地を奪われ、米兵の事件や事故の被害者にされ続け、基地の持つ重苦しい重圧の中で生きて来て、一方でそれをはね返すような文化も作ってきているのですが、重低音的な悲しさや重苦しさを思うとき、沖縄を切り捨て、基地を押しつけてきた

本土のもののひとりとして、立ち上がっている基地反対闘争に連帯し支えなければならぬと思うのです。そして戦争やファシズムへの突撃を許してはならないという思いを、わたし自身も抱いていました。

たわしの映像鑑賞メモ 006

・三上智恵監督「標的の村」劇場公開版

琉球朝日放送で放送されたものが本土ではほとんど上映されなかったもので、劇場公開版として作られた映画です。今は自主上映運動として、いろんなところで行われています。わたしは劇場公開されたころは、母の介護で映画や講演などには参加できず、見落としていました。もっと前に他の所にも当たっていたのですが、「一杯だ」とか断られ、今回は「法政大学Ⅱ部九条の会」の自主上映会に滑り込ませてもらいました。沖縄タイムス記者の講演会付きです。

映画は琉球朝日放送版と、運動的なところのエッセンスはだいたい同じなのですが、沖縄の自然の中での日常生活のところが多く出てきます。運動がなかったら、その生活をほんとうに楽しめたのに、という思いを抱きながら、それと対比される運動が浮かびあがっていくのです。子ども達がかわいいのです。亀が歩いている画面を前に描いて、子ども達が遊んでいるシーンのカメラアングルのすてきなシーンがあります。遊び心をもった監督の感性に感嘆していました。

普天間基地を車と座り込みで封鎖した運動の中で、安里屋ユンタ（元歌は八重山農民の抵抗の歌）を車の中で歌っているシーンは何度観ても涙が止まりません。

講演は沖縄の基地の現状や本土でマスコミが取り上げないなどの問題が語られていました。もはや廃部になった法制Ⅱ部の卒業生が多く参加していて、質問や沖縄まで出掛けて行っているひとたちの意見なども出ていて、こういう形の草の根の運動が続いているのだなど、共鳴していました。

たわしの映像鑑賞メモ 007

・小熊英二監督「首相官邸前で」2015

毎週金曜の夜に首相官邸前で、脱原発・反原発の抗議集会が継続して行われています。今は、何か特別な呼びかけがなければ国会前と合わせて、1000人から2000人規模なのですが、一時は20万のひとが集まる集会のようです。

その運動が、どのようにして始まり、どのような形で進んでいったのか、原発事故の時の首相であった菅元首相の事故時の状況のインタビューも含んで、被災者、日本に滞在している外国人、そして運動の担い手のひとたちにインタビューし、そしてデモに参加していたひとが撮影していたビデオの提供を受け作られたドキュメンタリー映画です。

これは個の主体性を尊重する新しい形の社会運動なのです。その運動は、そのデモにも一部参加していたSEALDsのひとたちに継承され、更に新しい運動形態、ラップ調のコールなども生み出し、国会前の戦争法案反対の運動として展開されました。

わたしは、20 万の集会のときは、集会とか講演会とか参加できず、やっと一年前から官邸前集会に参加し出したのですが、当時の模様はほとんどマスコミで取り上げられなかったもので、その状況を少しは追体験できました。貴重な映像です。

監督は歴史社会学者で、『1968』とかいう著作を書いています。何か、集会の時の発言とか聞きながら、インターネット上の発言とか読みながら、ちょっと違和を感じつつ、まだ読めないでいます。

さて、わたしがこの映画を観ながら感じたことを書き置きます。

ひとつは警察の規制・弾圧です。この脱原発・反原発の運動においても、集会の規模を抑えていくということで、規制や弾圧が起きていたということです。そして、それが戦争法案での過剰警備や不当逮捕という弾圧として、増幅して顕れていたということが、この映画を観ていてとらえられました。わたしはきちっとそのあたりをとらえ返した反撃の運動が必要なのだと思うのですが、まるで初めて起きたかのような対応になっているのです。だから、むしろ 70 年安保世代が、自分たちが体験したことから、ファシズム的な動きとして規制に抗議している姿があったのです。勿論 SEALDs も「ファシズム通すな」というコールをしていたから、そのようなことを感じていたので、後になって弁護士さんたちと抗議に行ったりし、8/30 の警察のおかしな規制を突破する動きもあったのですが、ファシズム的なことに飲み込まれ、集会自体が開けないようになれば、運動自体が根こそぎつぶされていくこととして、このことはきちんと取り組んでいく必要があったのだと思います。ですから、自然発生的にも抗議の声や動きがあり、それをつぶそうとする警察の動きもあったのです。

もうひとつは、民意が反映されない政治システムを作り上げられているということです。

よく、公約に掲げて選挙を闘い過半数をとったから、その公約は（全部）承認されたとか、おかしなことを言っているのですが、小泉郵政民営化選挙のように単一の課題で、選挙戦をやったらならまだしも、そんなおかしな話はないのです。そして、次の選挙で信任を受けるとかいう話ですが、間接民主主義で次の選挙に信任的投票とかいう話をしていいますが、それはひとつひとつの議決の信任投票ではなく、一括の信任です。しかも、争点をいくらでもずらせるのです。一般に、投票行動の時に何を重視して投票するかというデータが出ていますが、「経済と雇用」です（だから、アベノミクスのおおうそを暴いていくことが必要です）。だから、原発とか戦争法案とかはそもそも自民党は公約違反しているし、書いていても少しで、「そのことを掲げて選挙した」という代物ではないのです。選挙制度自体が民意を反映しないシステムになっていて、それらのことで政治不信があるから、投票率がどんどん落ちていきます。そしてマスコミがきちんと批判をしていかないことも作られています。むしろ、政治不信を生み出すことで、投票率を下げるといふことさえ意図しているかのようです。同じ事がくり返されています。

もちろん、そういう中でも選挙ということでも民意を示すことも必要ですが、そもそも、間接民主主義の制度が機能しなくなっているのです。選挙制度のことよりも、むしろそんな間接民主主義自体を問題にしていく必要があるのだと思うのです。直接民主主義の運動をしていたのに、それを間接民主主義の中に流し込むようなことをしていても、政治は変わらないシステムになっている、だから、もっとごまかし政治のシステム自体を暴いてい

く活動が必要なのだと思うのです。

投票行動ということでも言えば、なぜわざわざ間接にしておく必要があるのか、インターネットを使っただけの直接民主主義に切り替えることも可能になってきています。「衆愚政治」とかいつているひとがいるのですが、政治家ほど「衆愚」なものはありません。それこそ「民衆なめんな」です。

そのような議論も含めて、ファシズム的な動きに対峙し得る運動作りが必要になっていると思うのです。

国会議事堂前で—ファシズムの波を押し返すために—

—昨年9月から官邸前の反原発・脱原発の集会に参加してしていました。官邸前の集会参加者の数が減っていく中で、原発再稼働が進められていくのではないかという思いから、わたしは数に撒いて参加していたので、SEALDs が戦争法案反対の抗議集会を始めたころには、SEALDs は学生の団体で、主に学生を中心に呼びかけていたこともあって、国会前の方には行っていなかったのですが、ある日官邸前の集会が雨の予想でお休みになり、国会前「希望のエリア」ならやっているとのことで、そちらに行き、それが終わって、既に始まっていた SEALDs の集会に参加しました。「学生のひとは前に」とかいう誘導があったので、遠慮がちに参加したのですが、それでも結構年配のひとも参加していました。で、芸術性も感じられるラップ調のコールにも惹かれて、官邸前の集会が終わった後の SEALDs の集会にも参加し始めました。最初は、誘導を主催者の学生がやっていました。そのうちに、警察官が学生の誘導を押しつけて誘導を始めました。そして、人数が増えていくと、明らかに集会の規模を小さくする小さく見せる規制を始めたのです。SEALDs はカンパで運営しているのですが、最初のころはスピーカーをちゃんと備えていず、近くまでいかないとコールが聞こえないということもあり、またラップ調のコールは一種のパフォーマンス的なことがあり、側まで行って見ようということになります。そういうところで、SEALDs—シールズの集会が見える側へ集会参加者は行こうとします。それを、最初参加者が少ない内は一般的交通整理的なことだったのですが、参加者を増やさないという意向をもった警察の警備に変わっていったのです。シールズの側に行く道を警察がテープをはったり、スクラムを組んだりして封鎖し始めたのです。名目は、「もうシールズのいる側（北庭側）は一杯で、危険だから安全を確保するため」ということです。ところが、夜の集会で、早めに帰るひとがいて、出入りが激しいのです。だから、一時的にそれなりに「一杯」になっても、帰るひとがぞろぞろいて空いていくのです。「後ろを見ろ、空いている」と抗議していました。弁護士さんが見回りに来ていて交渉しているらしいのですが、今度は「指揮者と連絡が取れない」とかいう弁護士さんの話です。意味不明です。警備で「警察官のクーデター」でも起きているのではない限り、指揮系列が乱れるなんてあり得ないのです。シールズのコールに「憲法無視する総理はいらない」というコールがあるのですが、「法律無視する警察首だ」という話です。安全のための誘導などと称しているのですが、

なんのための「誘導」か、「集会の規模を小さくする」という意図が見え見えなのです。そして、戦争法案の審議が山場にさしかかり、抗議の一が増えていくと、それを抑えるというところで、威嚇のための（暴力の行使も含んだ）逮捕、威嚇のための警察官の大量導入（まるで警察官のデモ）のような警備になっていくのです。実際に、インターネット上で、官邸サイドから警察に、「集会を規制して規模を大きくするな」とか、「車道に出すな」という指示が出ていたという話も出ています。こういう話は、オフレコで取材しているので、誰が言ったのか出てきません。そもそもマスコミのトップが首相と定期的にお食事会などしているということも出ています。まさに「報道の自由」の自死行為です。

警察官は公僕です。給料は税金から出ています。首相や与党の私用の警備をやっているわけではないはずです。

そもそも、このような違法警備がなされたのは、官邸前の 2012 年の 20 万の大集会への、官邸サイド—その意向を受けた警察側の総括から来ているようなのです。それなのに、運動側がそれをきちっと押さえどう突破していくのかの道筋が見えません。今回の違法規制で、抗議の声をあげていたのは、70 安保世代が多かったようです。シールズのコールに「ファシスト通すな」というコールがあります。まさにファシズムの危機ということを感じていたからこそそのコールで、警察の違法とも言える警備に抗議していたのです。

8/30 に大結集を呼びかける国会周辺集会がありました。そのときの警備は意味不明の警備でした。車道を封鎖しておいて、歩道にひとが溢れているのに、車道にひとを入れないのです。このときは、シールズも「おしくらまんじゅ」的に規制を決壊させました。他のところでも決壊が起き、12 万の大集会になりました。

その後も、車道の意味不明の封鎖は続き、車道を解放すればいいのに、車道の中の警察の人員を増やすなどという「警察官の（威嚇）デモ」、そして明らかに威嚇目的の 13 名の逮捕という事態にいたります。

今回の大きな運動になっていったのは、反原発の首相官邸前の脱原発の集会の流れの中で、国会前でも集会が開かれていたからこそです。戦争法案への反対の運動とともに、まさにファシズム的な警察警備との対峙がそこにあったのです。戦争法案や戦争反対の運動は立て直せますが、ファシズムの波に飲み込まれたら、一切の運動が成立しなくなります。だから、このファシズムへの流れを押しとどめることもきちんと押さええて動いて行く必要があったのだと思うのです。

国会議員のひとが警察に抗議にいったという話はでていました。国会議員には国政調査権があるはずですが、警察がそれをけんもほろろに相手にしないというようなこともあったようです。そのあたりも含んで、もう一度反ファシズムということを押さえ直す必要を感じていました。

HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 54 号」アップ(15/10/21)

◆ホームページもブログも少し読みやすくするために整理しようと思っています。宿題の作業が落ち着いてから。読書メモに出している本を参考文献として、アップしていく作業もやっていかななくては、そして、著者との対話として、それを届ける作業もしていかななくてはとも思っています。ブログ迷惑コメントでストップしていたコメントを受け取れるようにしました。いろいろ意見をもらえたらと願っています。

◆「障害ってなーに？」を題名を替えて、いくつか削除し、大切な肝心な章を書き足して出版化を試みます。そのために、とりあえずHPから削除しました。

(編集後記)

◆隔月から少し遅れました。戦争法案が山場にかかる前に反対の意思表示と呼びかけを出そうかと思っていたのですが、そのまま、強行採決まで進んでしまって、出し損ない、おまけにいろいろ出てきてしまって、何やかやと動き始め、逆に遅くなってしまいました。しかも、できるだけ読みやすいようにコンパクトにとしようとしていたのに、今までにない頁数になってしまいました。

◆8月から9月にかけて怒濤の二ヶ月になりました。金曜の官邸前の反原発の集会、一時間半も少しきつさを感じて、老いを感じていたのですが、官邸前の反原発から、国会前の戦争法案反対の集会に流れて連続三時間くらいになり、さらに、戦争法案の強行採決反対で、国会前で夜通しの抗議行動、11 時間連続。わたしにもこんな体力があったのだと、不思議に思っています。戦争法案をなんとか止められないかという思いも勿論あったのですが、わたしは警察のおかしな過剰警備、というよりまさにファシズム的な動きはまさに運動を根こそぎつぶしていくことではないかととらえ、それに抗議し、写真を撮り SNS で流したりしていました。

◆巻頭言の文、何かこのところアベ政治批判ばかりになっています。

第二弾の批判を書いて、この号の編集にとりかかっているところで、「子どもの貧困は寄付でとか」、もうその中身の破綻的なことが出ています。経済団体の代表集めて、設備投資しろとか、そもそもこのひとたちは、この社会の経済のしくみを知らないのではないのかと思われるような、おかしな発言もしたりしています。

徹底的にアベ政治のおかしさをあばき、みんなで「ハダカの王様、誰だーアベだ」ということを広げて行かなくてはと思っています。

◆もうひとつの「巻頭言」的になった「アベ談話批判」はダブルスタンダードのアベ政治批判を暴く作業として書き置きました。自民保守の方にシフトしたことをファシズム的なアベノ政治を抑えたというところで評価したり、謝罪のキーワードを入れたことを評価するような話もでてきます。また批判ばかりしていないで、評価するところは評価したらというような意見も出てきそうです。ですが、アベ政治の本心隠しのごまかしと、大嘘つきの政治をきちんと暴いていく必要があると思っています。そのようなところでのアベ談話の精細な分析です。

◆読書メモは、あちこちに飛びました。沖縄の基地問題が焦点化しているところで、映像

鑑賞に会わせて本を1冊読みました。今回は医療関係が主になっています。ぼつぼつ一段落着きそうです。近経関係の本は、議論の中で文献としてあげてもらった本です。こういう形で思いの他の収穫が得られていくのですが、読書計画が一生分を越えている現状は辛いものがあります。議論的なことは何でもかんでも反応しないで、少し抑えていくことも必要なのかもしれません。

◆映像メモ沖縄を中心にして観ていたのですが、今回はいろいろ広がっています。書き言葉よりも、伝わること広がりやすいこと、こちらの方にも力を入れていきます。

◆「国会前にて」警察の動きを精細に押さえて置きました。マスコミがきちんと報道せず、むしろ「恐い運動」というような報道をしている御用新聞もあり、きちんと押さえ、真実を伝えていくためにも・・・。

◆今回「フクシマを忘れない」は、休んでしまいました。原発の再稼働が進み出し、もう一度こちらの運動に力を入れ、情報もきちんと伝えていく作業に力を入れていきます。

◆母の介護の反省記、もう一度基本的な方向性を見直しをします。出版化まで至り着くかどうか、とにかくまとめの作業に入ります。毎回のように書いているのですが、次回も宿題の関係で、遅れるかもしれません。

反障害－反差別研究会

■会の性格規定

今、「障害」という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

■連絡先

Eメール hiro3.ads@ac.auone-net.jp

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

ホームページトップ

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/newpage1.html>

「反障害通信」一覧

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/httpwww.k3.dion.ne.jp~adsnews.html.html>